

ダニエル預言書

「ダニエル」という名前は、「天主はわが審判者、すなわち我に敵する者に対するわが防衛者」という意味である。

ダニエルはいわゆる五大予言者の一人で、イスラエル民族のなかでもめずらしいほどの美しい容姿を持っていた。彼の話にはエジプトのヨゼフと似た所がいろいろある。

ダニエルはユデアのある貴族の家に生まれたが、彼が同時代の貴族と異なっていた点は、きわめて信心深かつたことであつて、ナブコドノソルが始めてイエルサレムを占領後連れ去つた捕虜の中に、彼も加わつていた。

バビロンでは、ただ好遇されたばかりでなく、捕虜仲間の青年数名と共に、身分に応わしい教育を受けられた。彼が外国人であるにもかかわらず、バビロンで高い地位にあげられたのは、御民を救うための天主の御摂理であつたのである。

ダニエル預言書はいつも神感の書と認められていた。聖主さえ本書を引用しておいでになる。メシアについての本書の予言があまりにも明らかである所から、その書かれた時代がメシアに近い頃であつたに違いないという少数の人々の主張は、その唱道者の合理的精神から生まれたものである。

第一 章

バビロンの宮殿におけるダニエル及びその仲間

ユダ王ヨアキム統治の第三年に、バビロン王ナブコドノソル、イエルサレムに来りて之を囲めり。時に主彼の手に、ユダ王ヨアキムと天主の家の器具の一部とを付し給いしかば、¹⁾ 彼是等を携えてセンナール²⁾ の地に赴き、己が神の家に行きて、その器具を己が神の宝庫³⁾ に納めた。次いで王侍従等の長アスフェネズに云いけるは、イスラエルの子等の中、及び王侯の裔の中より、数人を召し来るべし、⁴⁾ そは若者にして、身に些かも玷なく、容姿麗しくして、一切の智慧に秀で、知識に精しくして、よき躾けを受けたる者、王宮に仕うるに足る者たるべし、是彼等にカルデア人の文字と言語とを教えんが為なりと。⁴⁾ かくて王、己が食する物と己が飲む葡萄酒とを、日毎彼等に分ち扶持することと定め、三年の間養い、然る後王の眼前に立たしめんとせり。大さて是等の中

第一章 リイエ

ルサレム占領は西紀前六〇六年のこと。—²⁾ バ

ピロニアの古名創一〇・一〇。

一一・一二。賽一

一一・一など参照。

—³⁾ 社の祭具などがしまつてある所。

4) こうして賽三九・七の預言が成就した。

に、ユダの子等に属する、ダニエル、アナニア、ミサエル、及びアザリアあり
 しが、^セ_{侍従等の長彼等に名をつけ、ダニエルをバルタッサル、アナニアをシ}
 ドラク、ミサエルをミサク、またアザリアをアブデナゴと称びなせり。^{ハ然る}
 にダニエルは、王の食卓により、またその飲む葡萄酒により、身を汚さじ⁵⁾と
 その心に思い定め、己が身を汚さずしてあるを得しめよと、侍従等の長に願え
 り。^九さて天主はダニエルに侍従等の長の寵愛と憐憫を得しめ給いしが、
 一〇侍従等の長ダニエルに云いけるは、我は汝等の為に食物飲料を指定め給える
 わが主なる王を懼る。彼もし汝等の顔の、同年輩の他の若者よりも恥れたるを
 見ることあらんか、汝等王の前にわが首を危うくせん。二ここにおいてダニエ
 ル、侍従等の長がダニエル、アナニア、ミサエル、及びアザリアの監督と定め
 たる、マラサル⁶⁾に云いけるは、ニ乞う、十日の間汝の下僕なる我等を試み、
 我等に食物として野菜を、飲料として水を与えしめんことを。ニしかして我等
 の顔と、王の食物を食する若者等の顔とを見くらべ、汝のよしと見ん所を、下も

⁵⁾天主の律法で禁じられてゐる食物をとることによつて。

6)固有名詞で「監督」という意味。

一四
一五
一六
一七
一八
一九
二〇
二一

僕等になし給え、と。一四彼乃ち是等の言を聴きて、十日の間彼等を試みたるに、五十日の後にも彼等の顔は、王の食物を食したるすべての若者等より色よく肥えて見えしかば、一六マラサル彼等の食物と飲料の葡萄酒とを取りて、彼等に野菜を与えたり。一七この若者等には、天主知識とあらゆる書を悟る力と智慧とを与えていたまに野菜をあたたた諸種の幻象と夢とを悟る力をも授け給えり。一八さて王がしかじかの日数を経て彼等を召し入るべしと云い置きたる、その日数満ちしかば、侍従等の長彼等を導きてナブコドノソルの眼前に入れり。一九かくて王彼等と語り見たるに、一同の中にダニエル、アナニア、ミサエル、及びアザリアの如き者なかりしかば、彼等王の眼前に仕うることとなれり。二〇王彼等に語り見たるに、凡そ智慧と悟る力とを要する事にかけては、彼等その全国に在るすべての占筮師と賢人とに十倍も優り居たり。二一ダニエルはキルス王の元年まで、即ち三年後。五

(7) こういうことを書いたのは、以下の話の準備。

(8) 即ち三年後。五節参照。(9) 「肩

をならべる者がないほどすぐれていい」という意味の整数。(10) この「まで」は、その年に彼が死んだといふ意味ではなくバビロンにとつての重要なこの出来事のあつた時まだ生きていたという意味。本一六・二八。

第二章

ダニエル天主の示しによりてナブコドノソルの夢の意を曉り、之を解き明かす

一 ナブコドノソル統治の第二年に¹⁾ ナブコドノソル夢を見て、その心怯えしが、彼その夢を忘れたり。 = ここにおいて王、占卜師、賢人、魔術師、カルデア人²⁾等を召し集むべしと命じたり、是、彼等をしてその夢を王に示さしめんとてなり。彼等乃ち來りて王の前に立ちたるに、王彼等に云いけるは、我夢を見しかども、心乱れたれば、わが見し所を憶えおらず。四カルデア人等シリア語³⁾もて王に答えるは、王よ、恒久に生き給えかし、その夢を下僕等に告げ給え、さらば我等その説明を申し述べん、と。五王答えてカルデア人等に云いけるは、我その事を忘れたり。汝等もしその夢とその意味とを我に

第二章 1) この王統治の二年にはダニエルはバビロンに来てすでに三年を越えていた。故に彼は、ナブコドノソルが即位前、皇太子として、父ナボバラッサルの代りに出征した時、そこへ連れて来られたに違いない。—2)カルデア人というのは、ここでは民族の名ではなく、王の顧問官たちの特別な階級の名。—3)ヘブレオ語本「アラメア語」。これは縁に書かれた註で、彼らが外国語で答えたことを暗示するため、ダニエルが以下をアラメア語で書いたとの意。

示さずんば、汝等は死すべく、汝等の家は没収せらるべし。⁴⁾ 六されど汝等もしその夢とその意味とを我に示さば、我汝等に報酬と贈物と大なる榮誉とを與えん、さればその夢とその説明とを我に示せ、と。彼等また答えて云いけるは、王その夢を下僕等に告げ給えかし、さらば我等その説明を示さん、と。八王答えて云いけるは、我は確かに知る、汝等は我がその事を忘れたるを知るが故に、時を延ばさんとするなり。⁵⁾ 九されば汝等もしその夢を我に示さずば、汝等に就きての判定はただ一つあるのみ、即ち汝等は虚偽にして欺瞞に満ちたる説明を捏造し、そを我に語りて、時の過ぎ去るを待たんとするなり。故にその夢を我に告げよ、さらば我汝等がその真との説明をもなすことを知るを得ん、と。一〇その時カルデア人等王の前に答えて云いけるは、王よ、地上には汝の仰せ事を果たし得る人一人だになし、さればいかに偉大にして勢力ある王と雖も、かかる事を占卜師、賢人、力

ルデア人等に問う者は絶えてあらず。二寔に王よ、汝の問い合わせ給う事は難し。

⁴⁾ 国家の利益のために沒収されるであろう。カルデア語本「なんじらの家はなんじらの家はきだめとなるんじらん」。一〇彼らが時をのばそうとしたのは、王に夢を再び思い出させるためかもしくは王の側近に対する言葉から夢を知るため

三
 神々を除きては王の御眼前に之を示し得る者絶えて見当たらざるに、神々の人と語らい給うことあらざればなり。⁶⁾ 二二 王これを聞くや、猛り立ちて大いに怒り、バビロンの智者等を悉く殺すべしと命じたり。二三 この勅令出でたるにより、人々智者等を殺しあが、ダニエルとその仲間の者をも殺さんとて探したり。一四 時にダニエル、バビロンの智者等を殺さんと出で来る、王の軍将アリオクに、命令のことその判決のことを尋ね、一五 王の命を受けたる彼に、何故王の面前よりかくも慘しき宣告出でたるかを問えり。是においてアリオク、その事をダニエルに告げたるに、一六 ダニエル入りて、解答を王に示すべき邊を己に与え給えかしと王に請えり。一七 次いで彼その家に入り、その仲間なるアナニアとミサエルとアザリアとに事の次第を告げ、一八 かくて彼等ダニエルとその仲間の者が、バビロンの他の智者等と共に亡ぶることなからんために、この秘密に就き天つ御神⁷⁾ の御面前より御憐憫⁸⁾ を求めたり。一九 然るにその秘密夜に幻象⁸⁾ を以てダニエルに啓示され

6) バビロンの神々に関する教説によれば人が生まれると共にその守護神となる神々があつた。また人間の外部にいる一段と高級な神々もあつた。ここで占者たちが言つているのは後者のこと。一七 天主創二四・七。8) 夢の中ではなく、祈り

二〇
しかば、ダニエル天つ御神を頌え、三〇語り出でて云いけるは、主の御名は世より世々に至るまで讀むべきかな、智慧と權能とはその有し給う所なればなり。三一彼は時と世代とを変え、王国を亡ぼし王国を興し、智者に智慧を、理解力ある者に学識を与えて給う。三二彼は隠れたる深き事をも顯し、幽玄にある事とも知り給う。光明彼の許にあり。三三我等の父祖の天主よ、我汝に感謝し汝を讃め称え奉る、そは汝我に智慧と力とを賜い、且我等の汝に願い奉りし事を、今我に示し給い、王のかの事を我等に顯し給いたればなり、と。三四然る後ダニエル、王がバビロンの智者等を殺すべしと命じおきたる、アリオクの許に入りて、之にかく云いぬ、バビロンの智者等を亡ぼすなかれ、¹⁰⁾われを王の御眼前に導き給え、さらば我王に解説を告げまつらん、と。三五是においてアリオク、ダニエルを伴い急ぎ王の許に入りて、之に云いけるは、我ユダより捕え移されし子等の中より、王にかの解説を告げ奉らんとする者を一人見出でたり。三六王答えて、バルタツサルと名のるダニエルに云いけるは、

によつて
与えられ
た啓視の
中で。

⁹⁾哥前四

一・九。
八・一二。
約壹一・五。

五。
約壹一・
10)ダニエ

ルのおか
げでほか
の魔術師
たちも死
を免れた

汝寔にわが見し夢とその解釈とを我に示し得と思うか、と。ニセダニエル王の前に答えて云いけるは、王の問い合わせたも給う秘密は、智者、賢人、占卜師、陰陽師の中に、之を王に示し得る者絶えてあらず。二八されど秘密を顯し給う天主の天に在すあり、彼、末の日頃11に起るべき事をば、ナブコドノソル王よ、汝に示し給えり。汝の夢、即ち汝が臥床において見し幻象は次の如し、二九王よ、汝臥床の中にてこの後起るべき事を、思案らし給いしに、祕密を顯し給う者、起るべき事を汝に示し給えり。三〇この祕密が我にもまた顯されたるは、すべての生ける者よりも我的智慧優れたるが故にあらず、ただその解釈が王に告げられ、汝その心の思念を知り給わんが為なり。

三一王よ、汝見給いしに、視よ、一つの大なる像の如きものあり、その像は大きくして丈高く、汝の前に立ちおりしが、その形状は恐ろしかりき。

三二この像の頭は純金、また胸と腕とは銀、腹と腿とは青銅にして、三三脛は鉄、足は一部鉄、一部粘土なりき。三四汝かく見給える内に、一つの石人手

(11)アラメア語の「後に起こと」いう言い方は近い将来も遠い将来も包含している。ダニエルの預言は、メシア時代をも、それよりあとの大時代をもさしてゐる。

三五 によらず山より研られて出で、その像の鉄と粘土との足にあたりて之を碎きぬ。三五 その時鉄も粘土も、青銅も銀も金も、共に碎け散りて、宛ら夏の打禾場の糲殻の如くなり、風に吹き去られて、何処を見てもその残れる所なかりき。然るに像にあたりし石は、大なる山となりて全地に充ちたり。三六 是こそその夢なれ。王よ、我等また汝の御前に、その解釈をも申し述べん。三七 汝は王等の王にて在す。天つ御神は汝に、王国と力と權と榮とを授け給えり。三八 なおすべて人の子等と野の獸との棲む処を賜い、天空の鳥をも汝の手に与え、万の物を汝の權に従わしめ給えり。されば汝は金の頭なり。三九 さて汝の後に、汝に劣れる他の王国起らん、是すなわち銀なり。また他に青銅の第三の王国起りて、全世界を治むべし。四〇 更に第四の王国は鉄の如くならん。そは鉄がすべての物を碎きひしぐが如く、是等を悉く碎き滅ぼすべし。四一 さて汝が見給いし足と足のゆびは、一部は陶師の粘土、一部は鉄なりしかば、その王国は分れ分れにならん。さりながら汝鉄が粘土と混れるを見給いしによりて、その本は鉄なるべし。四二 またその足の一部は鉄、一部は粘土なりし如く、その王国も一部は固く、一部は脆からん。四三 更に汝が見給いし鉄は、

粘土と混れるによりて、それら¹²⁾は實に人の種¹³⁾と混るべけれど、その互に固く着かざること、鉄が粘土と

混じり得ざる如くなるべし。¹⁴⁾

^{四四}

さてそれらの王国の

時代に、天つ御神一つの王国を起こし給わん、是は永

^{くに}

久に亡びざるべし。その王国は他の民に付さること

^{くに}

なくして、この國々を悉く碎き滅さん。かくて是は永

^{くに}

久に立ちてあるべし。¹⁵⁾

^{四五}

汝見給いしに、かの石人手

^{いじひと}

によらず、山より斫られて出で、¹⁶⁾粘土と鉄と青銅と、

^{ねんど}

銀と金とを粉々に碎きしは、大御神是によりて、この

^{おおみのかみこれ}

後に起るべきことを王に示し給えるなり。是は正夢に

^{これまさゆめ}

して、その解釈は確実なり。¹⁶⁾ここにおいてナブコド

^{ノソル王}

ノソル王、平伏してダニエルを挾し、犠牲と香とを彼

に献ぐべしと命じたり。¹⁷⁾

^{四七}

次いで王ダニエルに語り

¹²⁾四四節にある通り國々。 — ¹³⁾縁組み。即ち政略的結婚によつて。

¹⁴⁾天主の御国に対する世界的國家。

それはナブコドノソルが建てバルタ

サルで終つたバビロニア国、ダリウ

スで終つたペルシャ国、アレクサン

デル大王治下のマケドニア国、武力

で諸民族を征服したローマ帝国な

ど。 — ¹⁵⁾この最後の王国がメシアの

御国であることは疑いない。 — ¹⁶⁾こ

の石はメシアとその御国。かれは天

國の榮えを出て地上に降り、すべて

の人間の天主に反して作つたものを

碎き給う。 — ¹⁷⁾王は力ある神がダニ

エルを通じて自分に語り給うと悟り
彼を人間より上の、神に近い者とし
てあがめる。

四八

四九

て云ひけるは、寔に汝等の天主は神々の神18)王等の主にして、奥義を顯す者なり、そは汝この秘密を啓き示すを得たればなり。四八 王乃ちダニエルを高き位に挙げ、大なる贈物を數多之に与え、彼を立ててバビロンのすべての州の総督、バビロンのすべての智者の掌典等の長となせり。四九 ダニエルまた王に請いしかば、王シドラク、ミサク、及びアブデナゴを立てて、バビロンの州の事務を監督せしめたり。されどダニエルは王の宮廷にありき。

第三章

シドラク、ミサク、アブデナゴ、窯の火中に入れらる

一ナブコドノソル王、黄金2)もてり高さ六十クビト、幅六クビトの像1)を造り、之をバビロン州のドウラ²⁾平野に立てたり。ニさてナブコドノソル王人を遣して、大守、長官、士師、將軍、執政官、上役など諸州の司等をナブコドノソル王の立てたる像の奉獻式に來らしめんとて、悉く召し集めたり。是において大守、長官、士師、將軍、執政官、權力ある地位に挙げられ

18) われわれの神より上だ。
しかし、そう悟つてもナブコドノソルはやはり神々への信仰を捨てなかつた。

金の薄板で。
2) 「ドウラ」即ち「平野」

第三章 1) 黄

二

三

たる顯官など諸州の司等悉く、ナブコドノソル王の立てたる像の奉獻式

に臨まんとて集り來り、ナブコドノソル王の立てたる像の眼前に立ち

けるに、四伝令の者声高らかに呼ばわりけるは、諸民、諸族、諸語よ、汝

等にかく伝えらる、五汝等、喇叭、笛、小琴、堅琴、月琴、合奏³⁾など、

諸種の楽の音を聞かんか、その時には、平伏して、ナブコドノソル王の立

て給える、黄金の像を礼拝せよ。六されど何人かもし平伏して礼拝せざる

あらんか、その人は立ちどころに火の燃ゆる窯の中に投げ入れらるべし⁴⁾

と。七されば是によりて、すべての民喇叭、笛、小琴、堅琴、月琴、合奏

など、諸種の楽の音を開くや、諸民、諸族、諸語、みな平伏して、ナブコ

ドノソル王の立てたる黄金の像を礼拝せり。八然るにその時直にカルデア

人⁵⁾數人進み出で、ユデア人等を訴えて、九ナブコドノソル王に申しける

は、王よ、永久に生き給えかし、一〇王よ、汝は命を下して曰えらく、何人

も喇叭、笛、小琴、堅琴、月琴、合奏など、諸種の楽の音を聞かば、平伏

近隣一帯のこと。

3)ギリシャ語

αὐρηφορία

「音を合わせるもの」すなわち複音の笛。

4)バビロンで

当時めずらしくなかつた刑罰。

5)特種の魔術師をさすのではなく

カルデアに国籍を有する人たち。

カルデアに國籍を有する人

のではなく

カルデアに國籍を有する人

のではなく

カルデアに國籍を有する人

二
して黄金の像を礼拝すべし、二何人かもし平伏して礼拝せざるあらんか、その
人は火の燃ゆる窓の中に投げ入れらるべし、と。三然るに爰に、汝が立ててバ
ビロン州の事務を掌らしめ給えるニテアの人々、シドラク、ミサク、及びアブ
デナゴあり。この人々は、王よ、汝の勅命を軽んじて、汝の神々を崇めず、汝
の立て給える黄金の像を礼拝せざるなり、と。三是においてナブコドノソル、
猛り立ちて怒り、シドラク、ミサク、及びアブデナゴを引き来るべしと命じけ
れば、彼等直に王の眼前に引き立てられたり。四ナブコドノソル王、語を発し
て彼等に云いけるは、シドラク、ミサク、アブデナゴよ、汝等がわが神々を崇
めず、わが立てたる黄金の像を礼拝せずとは、真実なるか。五されば今、汝等
もしその覺悟あらば、いつにても喇叭、笛、小琴、堅琴、月琴、合奏など、諸
種の樂の音を聞かん時には、平伏して、わが立てたる黄金の像を礼拝せよ、さ
れど汝等もし礼拝せずば、立ちどころに火の燃ゆる窓の中に投げ入れらるべし。
然る時はいづれの神かわが手より汝等を救い出すことを得ん。六シドラク、

(6)こん
な不遜
な言葉
を吐い
ただけ
に、王
に対する大主
のふし
ぎな御
干涉が
一層明
らかに
なる。

ミサク、及びアブデナゴ、乃ちナブコドノソル王に答えて云ひけるは、
一七
我等この事に就きて汝に答うる必要なし。一七即ち見給え、我等が崇む
われら
る天主は、我等を火の燃ゆる窯より助け出し、王よ、汝の手より救う
われら
ることを得給う。一八また彼然することを欲み給わずとも、王よ、汝知り
たま
給えかし、我等は汝の神々を崇めず、汝の立て給える黄金の像を礼拜
われら
せじ。一九是においてナブコドノソル全く氣も狂わんばかりに怒り、シ
ドراك、ミサク、及びアブデナゴに對してその面色を変え、窯を常に
熱くしたるよりも七倍熱くすべしと命じ、二〇且己が軍隊の中のいと
力強き人々に、シドラク、ミサク、及びアブデナゴの足を縛りて、彼
等を火の燃ゆる窯⁸⁾の中に投げ入れよと命じたり。二一かくてこの人々
は、その股引、帽子、沓、及び衣服を着けたるまま、⁹⁾直に縛られ、
火の燃ゆる窯の中に投げ入れられぬ。三蓋は王の命頗る急なりしが故
なり。さて窯は甚だ熱かりしかば、その火焔はシドラク、ミサク、及

一九

一八

三

二〇

二

7) 多数を意味する
概数。一八石灰製
か煉瓦製のかまど
で、その中へ上の
口から死刑囚を投
げこんだらしい。
しかし横にも口が
あつて、そこから
は熔かす石や燃料
を入れたのである。一九衣服をぬ
がなかつたため、
それさえ焼けなか
つたことによつて
(九四節参照)、
奇跡がいよいよ引
き立つた。

びアブデナゴを投げ入れしかの人々を焼き殺せり。三ざる程にこの三人はヒエロニモが即ちシドラク、ミサク、及びアブデナゴは、縛られたるまま、火の燃ゆる窯の只中に落ちにけり。

以下は我ヘブレオ語の写本に見出さざりき。¹⁰⁾

三四然るに彼等焰の只中を歩みながら、天主を讃め、主を頌えたり。三五その時アザリアは立ちてかく祈れり、即ち火の只中にてその口を開き、云いけるは、三六主よ、我等の父祖の天主よ、汝は祝せられ給う、汝の御名は世々に榮ありて讃うべきかな。三七汝は我等になし給えるすべての事に正しく、汝の一切の御業は真にして、汝の道は直く、汝の御裁きは、悉く真なればなり。三八實に汝は、我等と我等の父祖の聖なる都イエルサレムとの上に来らしめ給える諸々の事によりて、真の審判を行い給えり。そは汝眞実と公義とによりて、我等の罪ゆえにこのすべての事を我等の上に來らしめ給いたればなり。三九蓋し我等は罪を犯し、汝を離れて、¹²⁾

二九

二八

二七

二六

二三

¹⁰⁾以下六十七節はテオドシオンの訳本から取つたので、そのへブレオ語原本にはあつたはず。七十人訳にもある。——¹¹⁾この祈りにはモイゼの五書や詩篇の多くの箇所が含まれている。¹²⁾殊に偶像礼拝によつて。

三〇

不義を行ひ、万の事に過てり。三〇即ち汝の御云付を聴かず、守らず、汝が我等に幸あらしめんとて、¹³⁾ 我等に命じ給える如くになさぞりき。三一されば汝が我等の上に來らしめ給えるすべての事、汝が我等になし給える一切の事は、汝之を真の公義によりて行い給えるなり。三二かくて汝は我等の敵なる、不義凶惡にして、邪曲をなす者の手に、不正にして全地にあるすべての者に超ゆる最悪しき王に、我等を付し給えり。三三されば今、我等は口を開くを得ず、我等は汝に事うる者と、汝を崇むる者とにとりて、恥辱となり名折となれり。¹⁴⁾三四願わくは、汝の御名の為に、我等をいつまでも付しおき給うことなれど、汝の契約をはいき廃棄し給うことなれ。三五汝の愛し給いしアブラハムと、汝の下僕イサーグと、汝の聖なる者イスラエルとの為に、汝の御憐憫を我等より取り去り給わざれ。三六そは汝彼等に告げて、彼等の後胤を天空の星の如く、浜の真砂の如く殖やせんと約し給いたればなり。三七それ、主よ、我等がいづれの國民よりも少くなり、今日全地において卑しめらるるに至りたるは、我等の罪の為なり。三八寔にこの

13) 申四
14) ギリシャ語

四〇

者に与えられたり」。facti sunt でなく facta sunt である

三九

時に当たりて、侯も、¹⁵⁾指導者も、預言者もなく、更に燔祭なく、犠祭なく、素祭なく、焚香なく、汝の御前に初穂を献ぐる処なきは、^{三九}我等に汝の御憐憫を蒙ることを得しめんが為なり。されば我等は心に痛悔し、精神に謙遜りて、嘉納せらればや。^{四〇}牡羊と牡牛との燔祭の如く、肥えたる小羊、幾千頭の献物の如く、我等の犠牲も今日汝の御眼前に献げられて、汝に嘉せられんことを、げに、汝に依頼む者は滅ぶることあらざればなり。^{四一}我等は今心を尽くして汝に従い、汝を畏れて、汝の御面を求めて奉る。^{四二}我等を滅亡に至らしめ給わずして、汝の柔和により、汝の憐憫の豊かなるによりて、我等を扱い給え。^{四三}汝の奇しき御作によりて我等を救い出し、主よ、汝の御名に榮あらしめ給え。^{四四}汝の下僕等に惡意を示したる者をして悉く滅びしめ給え。汝の全能によりて滅びしめ、その力をして挫けしめ給え。^{四五}かくて汝が主にして、全世界に榮ある唯一の神なることを、彼等に知らしめ給え。^{四六}さて彼等を投げ入れし王の臣僕等¹⁶⁾は、石油や麻屑や、瀝青や枯柴を以て、窯を熱す

四〇

四一
四二

四三

四五

四六

四六

¹⁵⁾ 王はまだ生きていたが、牢獄にいた。

記してある家來たことは別な人々が以下のことが二二節に前以て書いてあつたのか。

ることをやめざりしかば、四七 焰は窯の上に四十九¹⁷⁾ クビトも騰り、四八 遊しり出でて、カルデア人の中、窯の傍にありし者を焼き殺しぬ。四九 されど主の御使みつかい窯の中下り、アザリア及びその仲間の許に至りて火炎を窯の外へ逐いやり、五〇 窯の中を宛ら露おく涼風のそよぐが如くなしければ、火は全く彼等に触れず、これを苦しめず、これに何の害をも与えざりき。五一 是においてこの三人、窯の中ありながら、口を揃え天主を讃め頌え祝して云いけるは、五二 主よ、我ら等の父祖の天主よ、汝は祝せられ給う、世々にわたりて讃め称うべく、此上なく崇め奉るべきかな。汝の聖にして榮ある御名は祝せらる、万世にわたりて讃めべきかな。汝はその榮ある聖殿にありて祝せられ給う、世々にわたりて此上なく榮あり、此上なく讃め奉るべきかな。汝はその御國の玉座にありて祝せられ給う、世々にわたりて此上なく讃め、此上なく崇め奉るべきかな。五五 汝、底知れぬ淵を照覧し、智天使の上に坐し給う者は祝せられ給う、世々にわたりて讃め、此上なく崇め奉るべきかな。五六 汝は天の蒼穹にあり

17) 四十九は七九の倍数で、文字通りに取るべきで、文常な高さの意

て祝せられ給う、世々にわたりて榮あり、讃め奉るべきかな。五七主の諸々の御作よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。五八主の天使等よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。五九諸天より、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六〇天の上より、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六一主の万軍よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六二日と月よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六三天空の星辰よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六四諸々の雨と露よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六五大天主の諸々の風よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六六火と炎熱よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六七寒氣と炎暑よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。六八露と霜よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上

四八、
四八、
18)詩一

・六一
19)創一

七に述
べてあ
るのと
るのと
合う。

詩一四
八・四

20)目に
見える
参照。

天体。

六九

なく崇め奉れよ。六九つめ 冷たさと寒さよ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

此上なく崇め奉れよ。七〇こおりゆき 氷と雪よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

上なく崇め奉れよ。七一よるひる 夜と昼よ、²¹⁾ 主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

上なく崇め奉れよ。七二よる 光と闇よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

上なく崇め奉れよ。七三ひかりやみ 電光と雲よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

なく崇め奉れよ。七四ち 地は主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

なく崇め奉れよ。七五やまおか 山と丘よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

奉れよ。七六ち 凡て地に萌え出るものよ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

上なく崇め奉れよ。七七いがみ 泉よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

上なく崇め奉れよ。七八うみかわ 海と河よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此

崇め奉れよ。七八おおい 巨大なる魚と凡て水の中を泳ぐものよ、主を祝せよ、世々に至る

まで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八〇そら 天空の諸々の鳥よ、主を祝せよ、世々

に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八一もろもろ 諸々の野獸と家畜よ、主を祝せ

八一

七〇

七九

七八

七七

七六

七五

七四

七三

七二

八二	よ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八二人の子等よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八三イスラエルは主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八四主の司祭等よ、
八三	祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八五主の僕等よ、
八四	主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八六義しき者の靈と魂よ、22)主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。八七心聖にして謙れる者よ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく
八五	崇め奉れよ。八八アナニア、アザリア、ミサエルよ、主を祝せよ、世々に至るまで彼を讃め、此上なく崇め奉れよ。そは彼我等を冥府より助け出し、死の手より救い、焰の燃ゆる只中より我等を出し、火の只中より我等を助け給いたればなり。八九主に感謝せよ、彼は慈愛深くましまし、その御憐憫は永久に存すればなり。九〇凡て天主を畏む者よ、神々の神なる主を祝せよ。彼に讃美と感謝とを獻げよ、そはその御憐憫万世に至るまで存すればなり。(23)
八六	八七
八七	八八
八八	八九
八九	九〇

22) 「靈と魂」といは言ひ方は、活かす靈魂と思考する精神とは、通りの働き方をする人間の靈的なもとをさすとをさす。23)多くの聖書解釈者の説によれば、これは三人の若者

ヘ・ブレオ語のものにはここまでなし。我等が挿入したるは、テオドシオン版より訳出したるなり。

九一 是においてナブコドノソル王、驚き慌て立ち上り、その高官等に云いける
は、我等が縛りて火の中に投げ入れしは、三人にあらずや、彼等王に答えて云
いけるは、王よ、實に然り、と。九二 王答えて云いけるは、見よ、我見るに、彼
等四人にして、いざれも繩解けて火の中を歩みつつあり。しかも彼等に何の害
もあらず。四人目の者の容子は神の子に似たり、と。九三 次いでナブコドノソル
火の燃ゆる窓の口に近よりて云いけるは、至高き天主の下僕シドラク、ミサク、
アブデナゴよ、汝等出で来れ、と。よりてシドラク、ミサク、アブデナゴは、
直に火の中より出で来れり。九四 大守、長官、士師、及び王の権臣等、乃ち寄り
集まりてその人々を眺めしに、火も彼等の体を害する能わず、その頭の髪一筋
だに焦げず、その衣服も変らず、火の臭氣もこれに付きおらざりき。²⁴⁾ 九五 時に
ナブコドノソル言を發して云いけるは、彼等、即ちシドラク、ミサク、アブデ

がすでに前から知つてゐた美歌であると

24) 路二・七二・一八。

ナゴの神は頌むべきかな、彼はその天使を遣して、彼を頼むその下僕等を助け出せり。また彼等は己が天主の外、いざれの神にも事えず、礼拝を捧げざらん為に、王の言に従わず、その身を捨てたり。²⁵⁾されば我よりこの命令出でたるぞ、諸民、諸族、諸語の、シドラク、ミサク、及びアブデナ

ゴの天主に対して冒涜の言を吐かん者は、誰にても殺され、その家は毀たるべし。²⁶⁾蓋はかくの如く救う力ある神は、また他にあらざればなり、と。²⁷⁾是において王、シドラク、ミサク、及びアブデナゴを再び用いて、バビロン州を宰らしめたり。²⁸⁾九八ナブコドノソル王、全世界に住む諸民、諸國、諸語に告ぐ、願わくは汝等に平安の弥増さんことを。²⁹⁾至高き天主、³⁰⁾我の前にて徵と不思議とを行ひ給えり。されば我これを、公けにすることそ善けれと思えり。一〇〇そはその徵偉大にして、その不思議壯なればなり。

その御国は永遠の御国にして、その權は代々より代々に及ぶ。³¹⁾

²⁵⁾本二。
²⁶⁾本二。
五参照。
四七参照。

²⁷⁾本節は勅書の冒頭。

三一。七
•一四。
²⁸⁾本四。

第 四 章

ナブコドノソルの木の夢

一 我ナブコドノソル、わが家にて安らかに暮らし、わが宮殿にて榮華を極めおりしに、ニ一つの夢を見て、その為に怖れ、わが臥床における思案、わが頭の中の幻象に悩まされたり。三我乃ちバビロンの智者を悉くわが前に召し入れ、彼等をしてその夢の解釈を我に述べしむべしとの命を出せり。四是において占ト師、賢人、カルデア人、陰陽師等入り来りしかば、我彼等の前にてその夢を語りしが、彼等はその解明を我に示すことなかりき。五かくて遂にダニエルが眼前に入り来れり、是、わが神の名に因みバルタッサルと名づけられ、その身に聖なる神々の靈を宿せる者なり。我これが前にてかの夢を語りぬ。六占ト師の長、バルタッサルよ、汝がその身に聖なる神々の靈を宿すること、いかなる秘密も汝に解く能わざるなきことは、わが知る所なれば、汝、わが見たる夢にありし事と、その解釈とを語れ。セわが臥床における頭の中の幻象は次の

第四章
1) 本二
・二及
びその
註参照

如くなりき。我見しに、看よ、地の最中に一本の樹あり、その高きこと甚だし。八その木は大きくして強く、その頂上は天に達し、あまねく地の果にまで見えたり。九その葉はいと美しく、その果は夥しくして、その中にはすべてのものの食あり、その下には生物獸棲み、その枝には天空の鳥留まり、すべての肉ある物之を身の養いとなせり。一〇我わが臥床における頭の中の幻象の裡にて見しに、視よ、一人の警衛者²⁾にして聖なる者、天より下りしが、二彼声高らかに叫びてかく云いぬ、こゝの木を伐り倒し、その枝を切り放ち、その葉を振り落とし、その果を打ち散らし、その下に居る獸をして逃げ走らしめ、鳥をしてその枝より飛び去らしめよ。三さりながらその根株を地に残し置き、之³⁾を鉄と青銅との繩もて縛り、野にある草の中におき、天の露に濡れしめ、地の草の中にて野獸とその分を共にせしめよ。三その心は変りて人間らしさを失い、野獸の心これに与えられ、かくて七つの時⁴⁾その上を過ぎゆくべし。

二
三
一
九
八

(2)カルデア人は神々と人間との中間物の存在を信じていた。それには善いものも悪いのもあつた。ここにある「警衛者」はその一つ。一³⁾从此から事實そのものに、即ち王のこととに移る。(4)バビロン人もユダヤ人と同様「七」を聖数としていた。七十人訳やヒエロニ

一四 是、警衛者等の宣告による天命、聖者等の言と要求にして、そは生ける者も
 が、至高き者の人間の國を治め給うことを知るに至るを目的とするなり。彼は
 誰にもあれその欲し給う者に之を与え、最も卑しき人をその上に立つることを
 得給うなり。⁵⁾ 一五 我ナブコドノソル王この夢を見たり、さればバルタツサルよ、
 汝速かにその解釈を告げよ。それ、わが王国の智者等は皆その解釈を我に示
 すことを得ず、されど汝は、その身に聖なる神々の靈宿るによりて、之を能く
 するなり、と。一六 その時バルタツサルとも名のるダニエル、黙して独り胸の中
 に考え始め、一時間ばかりを経たり。かく彼その思いに悩みしが、王應えて云
 いけらく、バルタツサルよ、汝この夢とその解釈との為に憂うるなけれ、と。
 バルタツサル答えて云いけるは、わが主君よ、この夢汝を憎む者に、その解釈
 汝の敵に、当たれかし。一七 汝の見給いし木、即ち大きくて強く、その高きこ
 と天に達するばかりにして全地に見え、一八 その枝はいと美しく、その果はいと
 多くして、その中にすべてのものの食あり、その下に野の獸棲み、その枝

モその
 他多数
 の解釈
 者は、
 「七つ
 の時」
 を七年
 と解し
 てある
 5) 母上
 二八。一六・
 下。一一以

一九 に天空の鳥留まりしものは、一九是すなわち、王よ、汝なり。汝は偉大に且強く

なり、汝の威光は加わりて天にまでも及び、汝の權はあまねく地の果にまでも及べり。二〇また王見給いしに、一人の警衛者、一人の聖者の天より下り来て、

「この木を伐り倒して之を滅ぼせ。さりながら、その根株を地に残し置き、之を鉄と青銅との繩もて縛り、野にある草の中におき、天の露に濡れしめ、野獸

とその食を共にせしめ、七つの時のその上に過ぎゆくを俟て。」と云えるに由

り、二一わが主なる王に下れる至高者の宣告の解釈は次の如し。二二汝は人々の中

より逐われ、家畜野獸と共に住み、牛の如く草を喰み、天の露に濡れ給わん、

かくて至高者が人間の国を治め、誰にもあれその欲し給う者に、之を与え給う

ことを、汝が知るに至り給わん時まで、七つの時過ぎゆくべし。二三また彼そ

の根株、即ちその樹の根株を残し置くべしと命じたるにより、汝が凡て權は天

よりのものなりと曉り給いたらん後は、汝の國汝に残らん。二四されば王よ、わ

が諫言を嘉納せられ、施与をなして汝の罪を、貧者を憐みて汝の不義を贖い給

二五

え、然らば彼かれあるいは汝の愆なんじを赦し給うこともやらん、と。⁸⁾ 三五 是等の

事は皆みなナブコドノソル王の上に起り来れり。三六十二箇月を経たる後、王バビロ

ンの宮殿の中を歩みおりしが、三七その時彼言を発して云いけるは、是はこれ、

わが權勢の力と、わが威光の輝きとにより、我の建てて以て王城となしたる、

大バビロンならずや。三八その言なお王の口にある間に、声天より下れり、曰く、

ナブコドノソル王よ、汝に云う、汝の国汝を離れ去るべし。三九しかして汝は人

々の中より逐われ、家畜野獸と共に住み、牛の如く草を喰まん、かくて、至高

者が人間の国を治め、誰なれにもあれその欲し給う者に、之を与え給うことを汝が

知るに至らん時まで、七つの時過ぎゆくべし、と。三〇この言は立ちどころにナ

ブコドノソルの上に成就せり。即ち彼人々の中より逐われ、牛の如く草を喰み、

その身は天の露に濡れ、終にその髪毛は鷲の羽毛の如く、その爪は鳥の爪の如

くになりしなり。三一さてこの日々⁹⁾の果てたる後、我ナブコドノソル目をあげ

て天を望みしに、わが思慮分別我に帰りたれば、我至高者を祝し、永遠に生き

7) 天主

即ち、
二二節の至高
者。8) 集三
・三三9) 天主
の定め
給うた
時。

時。

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

給う者を讃め頌えたり、そはその權は常世の權にして、その御國は千代

万代に存すればなり。¹⁰⁾ 三三彼に較べては、地に住む者は悉く無に等し。

蓋し彼は地に住む者の間ににおいても、また天の諸々の能力に対しても、

御意のままになし給う。その御手を抑え止め、汝何ぞ然したるかと之

に云い得る者、一人だになし。三三恰もこの時わが思慮分別我に帰りて、

我わが王權の誉と榮とを回復したり。かくわが威容我に帰りしに、わが

高官等長官等、我を求めしかば、我また起ちて国を治めしが、¹¹⁾ 威光一

入我に増し加われり。^{三四)} されば今、我ナブコドノソル、天の王を讃め、

崇め、頌え奉る、そはその御作はすべて眞実にして、その道は正しきに
適い、高ぶりて歩む者を卑くすること得給えばなり。

三四

三三

三三

10) 本三・一〇〇
11) みな予言によ

つて、王の回復
することを知つ
ていたので、だ

れもそれまで敢
て王位を横取り
しなかつた。ま

た政務にあずか
つていたダニエ
ルも、王位が依
然確実に王のも
のであるよう配慮した。

第五章

バルタツサル王の瀆聖的饗宴

二 バルタツサル王¹²⁾ その高官等一千人の為に大なる酒宴を開き、各人そ

の年齢に応じて葡萄酒を飲みしが、²⁾ 王既にして酩酊するや、その父ナブコドノソルがエルサレムにある聖殿より運び移しし金銀の容器を持ち来るべしと命じたり、³⁾ 是、王とその高官等、ならびに彼の妻妾等、之を用いて飲まん為なりき。⁴⁾ やがてそのイエルサレムにある聖殿より運び移しし金銀の容器を持ち来りしかば、王とその高官等、ならびに彼の妻妾等、之を用いて飲めり。

四 彼等葡萄酒を飲みて、己が金銀青銅鉄木石等の神々を讃美しおりしに、五 折しも人の手の如き指現れて、燭台に向かえる王宮の壁の面に物を書きけるが、王その書ける手の指を見守り居たり。六 是において王の面は色変り、彼思ひ煩いて、その腰の関節は力抜け、その膝は相互に打ち合えり。七 王乃ち、声高く叫びて、賢人、カルデア人、占卜師等を召し來らしめ、そのバビロンの智者等に王言をかけて云いけるは、誰にもあれこの文字を読み、その

タツサルとは、この王の名ではなく、ただ一つの称号に過ぎない。

彼はバビロンを治めた

最後のカルデア人の王で、世俗の歴史にはナボニドと名を記されてゐる。ナブコドノソルの死後はその子エヴィルメロダクが王位に登り、そのあとをナボニドが継いだのである。

(2) カルデア本「彼(王)は一千人の前にて葡萄酒を飲めり」。——³⁾負けたイスラエル人の神を恥ずかしめるために。

意味を我に説明さん者には、我之に紫の衣を着せ、その頸に金の鎖をかけ、これをわが國における第三の者となすべし、と。八その時王の智者等悉く來りたれど、その文字を読むことも、その意味を王に告ぐることも、能わざりき。九この故にバルタッサル王、太く案じ煩い、その顔色変りしが、その高官等もまた狼狽し居たり。一〇然るに太后(4)王とその高官等とに事起りし由を聞き、酒宴の広間に入り来り、言を發して云いけるは、王よ、永久に生き給え、汝思ひ煩い給うなけれ、また顔色を変え給うなけれ。一二茲に汝の国に、⁵⁾聖なる神々の靈を身に宿せる一人の人あり。汝の父の御代、彼に知識と智慧とあること認められたり。されば、汝の父ナブコドノソル王は彼を立てて、賢人、呪文師、カルデア人、占卜師等の長となし給えり、王よ、我云う、汝の父然なし給えるなり。一三そは彼に、卓れたる靈と、聰明と、叡智と、夢を解き、秘密を啓き、難問を解く力とあること、認められたるによりて、王がバルタッサルという名を賜(5)いしダニエルなり。されば今、ダニエルを招

⁴⁾酒宴に列席していなかつた王の母太后は東国の宮廷では特別優越した地位を占めていた
⁵⁾ダニエル（本八二参照）は時々バビロンに居なかつた。

一三
かしめ給え、彼その意味を述べん、と。一三是においてダニエル召されて王の前に入りしに、王之に声をかけて云いけらく、汝はわが父王がユデアより引き來りし、ユダの俘囚の子等の一人なるダニエルなるか。一四我聞きたるに、汝は神々の靈を宿せりと云う。人々汝に卓れたる知識と理解力と智慧とを認めたり。一五さて今智者、賢人等、わが眼前に入り来りて、この文字を読み、その解釈を我に示さんとしたれど、彼等はこの文字の意味を我に告ぐること能わざりき。一六然るを我聞きたるに、汝は能く不明なる物事をも明らかにし、難問をも解くと云う。今もし汝この文字を読み、その解釈を我に示すことを得ば、我汝に紫の衣を着せ、汝の頸のまわりに金の鎖をかけ、汝をわが國における第三の侯となすべし、と。一七ダニエル之に答えて王の前に云いけるは、汝の贈物は汝自ら納め置き、汝の家の賜物は、他の人に之を与えるべし、然れども王よ、我は汝の為にその文字を読み、汝にその解釈を示し奉らん。一八王よ、至高き天主は汝の父ナブコドノソルに、国と権勢と榮と誉とを与えるべし。一九その彼に与え給いし権勢ゆえに、諸民、諸族、諸語は悉く戦きて彼を畏れたり。彼は己が欲する者を殺し、己が欲する者を討ち滅ぼ

6) 汝の
統治の
日数。

二〇
二一
二二
二三
二四
二五
二六

ぼし、己が欲する者を高くし、己が欲する者を低くせり。二〇さりながら彼の心高ぶり、その精神驕慢のため頑固となるに及びて、彼その國の玉座より引きおろされ、その榮を奪われ、三人の子等に逐われ、その心は獸の如くになり、その住處は野驢馬と共にして、牛の如く草を喰み、その身は天の露に濡れたり、彼至高者が人間の國を治め、誰にもあれその欲し給う者を之が上に立て給うことを知るに至るまでかくてありき。二三バルタツサルよ、彼の子なる汝も、是等の事を悉く知りながら、己が心を卑うせず、二三却つて天の主に対して思い上り、

二三
二四
二五
二六

その家の容器を汝の前に持ち來らしめ、汝も汝の高官等も、また汝の妻妾等も、之を用いて葡萄酒を飲み、剩え汝は、見ることも聞くことも感ずることもなき銀金青銅鉄木石の神々を讚めながら、汝の氣息、汝のすべての道をその手に握り給う天主を頌えざりき。二四さればこそ彼の許よりこの手の指遣されて、この記されたものを書けるなれ。二五書かれたる文字は次の如し、マネ、テケル、

二六
二五
二四
二三
二二
二一
二〇

フアレス、二六また語の解釈は次の如し、マネは、天主汝の治世⁶⁾を數えて、之

を終らしめ給えりとの謂、ミセテケルは、汝が衡にかけて秤られ、量目の不足を見あらわされたりとの謂、二八フアレスは、汝の国が分たれて、メデア人とペルシャ人に与えらるとの謂なり。是においてダニエル、王の命によりて紫の衣を着せられ、頸のまわりに金の鎖をかけられ、なお彼がその国において第三の者たる権を有する旨布令出されたり。三〇その夜カルデア人の王バルタッサルは殺され、⁷⁾ミメデア人ダリウス、⁸⁾六十二歳にしてその国を継げり。

第六章

獅子の穴におけるダニエル

一ダリウス、善しと思ひて、國に知事百二十人立て、以てその全國に配置し、⁹⁾また彼等の上に監督三人を立てしが、ダニエルもその一人なりき。是、知事等をして彼等に報告を呈出せしめ、王を煩わすことなからしめん為なりしなり。然るにダニエルは、

ナボニド及びキルスの年代記によれば、バルタッサルはバビロンが征服された時、西紀前五三九年チシユリの月の十五日から十六日になる夜中に殺された。ヘロドトウスとクセノフォンも、大酒宴の最中にバビロンの征服されたことと王の殺されたことを記している。⁸⁾「ダリウス」とは「征服者」の意。

その身に他よりも卓れて天主の靈¹⁾宿れるに由りて、すべての監督及び知事に優りければ、^四王は彼を立てて、全國を治めしめんと思えり。是においてその監督及び知事等、王の側より²⁾ダニエルを除くべき機會を窺いしが、何の云分をも嫌疑をも見出すこと能わざりき、そは忠義にして、彼には咎も、嫌疑も、絶えて見当らざりしが故なり。^五よりてかの人々云いけるは、このダニエルに対しては、恐らくその天主の法につきての外、我等何の隙をも見出すことあらじ、と。^六是において監督及び知事等、巧みにそれとなく王に勧めて之にかく云えり、ダリウス王よ、永久に生き給え。^七汝の國の監督、長官、知事、元老、士師等はみな相議りて、一つの勅令の發せられんことを望む。そは即ち、凡てこの三十日の間に、王よ、汝を除きて、いづれかの神または人に、何かの願い事をなさん者は、獅子の穴に投げ入れらるべし、との布告なり。されば今、王よ、この文を批准し、この勅令に署名し給え、是、メデア人及びペルシャ人の定めたる所が變る

第六章 1)原本にもテオドシオンの訳本にも「天主の」という語はない。即ち彼は特別の卓れた精神をもつていたのである。²⁾カルデア本「統治の方面より」即ち彼の行政に関して。

ことなく、³⁾ 且誰も之に背くを許さることなからん為なり、と。九よりてダリウス王勅令を出して、之を公布せり。一〇さてダニエルはこの事、即ちその法の布かれたることを知りて、己が家に入りしが、その高間のイエルサレム⁴⁾に向かえる窓を開き、日に三度その膝を屈め、天主の御前に礼拝感謝すること、従来習慣としてなし居たる如くなりき。一さればかの人々意を用いて彼を窺い、ダニエルがその天主に祈り願い居る所を見出したり。二彼等乃ち來りてかの布告につき王に云いけるは、王よ、汝は凡てこの三十日の間に、王よ、汝を除きて、いづれかの神または人に、何事かを願う人は、獅子の穴に投げ入れらるべきしと、定め給えるにあらずや、と。王彼等に答えて云いけるは、その事は眞実にして、メデア人及びペルシャ人の法令の破るべからざるが如し、と。三その時彼等答えて王の前に云いけるは、ユダの俘囚の子等の一人なるダニエルは、汝の法をも、汝の出し給える布告をも重んぜずして、日に三度己が流儀に従い祈願をこむるなり、と。四王はこの事を聞くや、太く悲しみ、ダニエルの為に

3) 王勅
4) 聖殿

心を碎きて之を救わんとし、日没までも力を尽くして之を助け出さんとせり。⁵⁾一五 然るにかの人々、王の意を了りて之に云いけるは、王よ、知り給たまえ、王の定めたる法令を変更すべからずとは、メデア人及びペルシャ人の法なることを、と。一六 是において王命を下したれば、人々ダニエルを引き來りて、獅子の穴に之を投げ入れたり。されど王ダニエルに云いけらく、汝の常に崇むる天主、彼ぞ汝を救わん、と。一七 次いで人々一つの石を持ち來りて、穴の口の上に据えしかば、王己が指環と高官等の指環とをもて之に封印を施せり、そはダニエルに対して何事をもなさしめざらん為なりき。⁵⁾一八 かくて王立ち去りてその家に入るや、夕食を摂らずして床に就けり。彼食物を己が前に出さざらしめしが、睡眠さえも彼を離れたりき。一九 やがて王明方夙に起き出でて、その獅子の穴に急ぎ行き、三穴に近づきて、悲しき声にダニエル呼び、之に云いけるは、活ける天主の下僕ダニエルよ、汝の常に仕うる天主、能く汝を獅子より救うことを得給いたるか。

5) 王が石に封印したのは、高官達がダニエルの無事な場合これを殺すことのできぬようにするため。高官達が石に封印したのは、王がダニエルのために何事も図り得ぬようにするため。

三二 ダニエル、王に答えて云いけるは、王よ、永久に生き給え、三わが天主その御使を遣して獅子の口を閉じ給いたれば、彼等我を害せざりき。そは我の正しきこと、彼の御前に見れたればなり。その上、王よ、我は汝の御前にも、曲事をなしたことなし、と。是において王彼の為に太く喜び、ダニエルを穴より出すべしと命じければ、ダニエル穴より出されしが、その身には何の傷も見當らざりき、そは彼その天主を信じたればなり。次いで王の命により、ダニエルを訴えしかの人々、引かれ來り、その子その妻と共に、獅子の穴に投げ入れられしに、その穴の底に到らざる内に、獅子之を捉え、その骨を悉く咬み碎けり。是においてダリウス王全地に住める諸民、諸族、諸語に勅書を發せり、曰く、願わくは汝等に平安の弥増さんことを。わが国全領土の人の皆ダニエルの天主を畏み懼ること、これわが茲に命ずる所なり、是は蓋し活ける天主、世々に限りなき者にして、その國は滅びず、その権は永劫に至るまで続くべければなり。彼は救う者拯くる者、天においても地においても徵や奇

蹟を行ふ者にして、即ちダニエルを獅子の穴より救いたる者なり、と。

8)本一・二一。
一三・六五。

二八さてダニエルが存えおりしはダリウスの治世、及びペルシャ人キルスの

治世なりき。⑧)

第七章

四王国を意味する四つの獸の幻象

一バビロンの王バルタッサルの元年に、¹⁾ ダニエル夢を見たり。そば臥床における頭の中の幻象にして、彼はその夢を録すに当りて、之を少數の語に纏め、その大要を述べたり、曰く、²⁾ 我夜にわが幻象の中にありて見しに、看よ、³⁾ 天津風四方より²⁾ 起りて大海³⁾ を襲い、⁴⁾ 四つの大いなる獸の、各々相異なるが、海より上り来れり。第一のものは牝獅子の如くにして鷺の翼ありしが、⁴⁾ 我見守りてありしに、やがてその翼抜き取られ、次いで地より起こされ、人の如く足にて立つや、人の心之に与えられたり。五また看よ、今一つの獸は熊の如くにして、一方に立ち、その口には歯の

第七章 1)西

紀前五四〇年

頃。 2)あら

ゆる方向から

3)異教の民。

4)翼のある獅

子はアッシリ

アの記念碑に

しばしば見ら
れる。

六

間に三本の肋骨をくわえ居りしが、⁵⁾ 之に向かいてかく云いし者ありき、「起ちて多量の肉を啖え」と。六その後我見しに、看よ、また一つ豹の如きものあり、その背には鳥の如く四つの翼を具えたり、この獸には四つの頭ありて、支配權之に与えられたり。⁶⁾ 七その後我夜のこの幻象の中に見しに、看よ、第四の獸は恐ろしく、奇異しくして、甚だ強く、大いなる鉄の歯を具えて、食い且咬み碎き、残余をその足にて踏み躡れり、是は我が前に見し他の獸と異りて、十本の角を具えたつのは我その角を眺め居りしに、看よ、その中よりも一本の小さき角生え出でけるが、その出でたるによりて、初の角のうち三本抜け落ちたり。しかも看よ、この角には、人の目の如き目あり、なお大いなる事を語る口あり。九我見守りてありしに、やがて終に玉座据えられ、齡長けたる者⁸⁾ 坐しけるが、その衣服は白きこと雪⁹⁾ の如く、その頭の髪は潔き羊毛の如く、その玉座は火焔にして、¹⁰⁾ その車輪は燃ゆる

九

八

七

⁵⁾多くの国を併する国、即ちダリ

ウス及びキルス治

下のメデア・ペル

シャ。一⁶⁾このす

ばしこい狡猾な獸

は、アレクサンデ

ル大王の代に急速

に領土を拡張した

ギリシャ・マケド

ニア帝国の象どり

7)一般の解釈によ

れば、これはローマ帝国。一⁸⁾永遠

の天主。一⁹⁾「聖」

の象徴。一¹⁰⁾完全

な正義の象徴。

火なりき。一〇彼の前よりは火の流迸り出でたり、彼に仕うる者万々、
 彼の前に侍る者億々あり、審判者11)坐して書開かれたり。一一我かの角12)の大
 いなる事を語る声によりて眺め居りしに、その獸殺されその軀壊られ
 て、焼かれんため火に入れらるるを見たり。一二また他の獸等の權力も奪
 い去られけるが、彼等にはその生存の期間、いついつまでと定められた
 い。二三かくて我夜のこの幻象の中にありて觀しに、看よ、人の子13)の如
 き者空の雲に乗りて來り、齡長けたる者の許に至りて、その眼前に導か
 れけるが、三四彼之に權と誉と國とを与えたり。諸民、諸族、諸語、すなわ
 ち之に仕うべし。その權は永遠の權にして奪うべからず、またその國は
 亡ぶることなかるべし。¹⁴⁾ 一五わが靈は戰けり、我ダニエル是等の事に怖
 れ、わが頭の中の幻象によりて思ひ煩い、一六傍に立てる者の一人15)に近
 づき、是等一切の事に就きて真意を問い合わせしに、彼我に事の解釈を
 告げ、我に教えけらく、一七この四つの大いなる獸は、地に興るべき四つ

11) 天主と最高の
 天使達。 12) 天

主に敵対する諸
 ハの勢力。殊に

偽キリスト。

13) イエズスがか
 く自称し給うた

ことを思い合わ
 せよ。 14) メシ

アの国。 15) 本三
 路一・三二。

三一。米四・七。

16) 天主の玉座の
 周囲にいた天使
 の一つ。

一八

一九

二〇

二一

二四

二五

の王国なり。一八されど至高き天主の聖者等¹⁶⁾その王国を受け、その王国を領して世々に及ばん、と。一九この後我が切に知らんと欲せしは、すべてと太く異りて甚だ恐ろしく、その歯と爪とは鉄にして、喰い且咬み碎き、残り余を足にて蹂み躡れる第四の獸のこと、二〇その頭に具えたる十本の角のこと、また生え出でてそれにより三本の角を落つるに至らしめたる他の角のこと、即ち日と大いなる事を語る口とを具えて、殘余のものよりも大いなりしかの角のことなりき。二一我看てありしに、視よ、かの角聖者等と戦い、之に勝ちしが、二二終に齡長けたる者來りて、至高者の聖者等に義を行ひぬ。即ちその時に及びて、聖者等國を獲たり。二三さて彼かく云えり、第四の獸は地上の第四の國なりとす、是はすべての國よりも大きくして、全世界を併呑し、蹂躪し、且粉碎せん。二四この國の十本¹⁷⁾の角は十人の王なりとす、されど是等の後にまた一人¹⁸⁾起ころん、彼は前の者等よりも強くして、その王三人を倒すべし。二五彼は至高者に逆らう言を吐き、至高者の聖者等を

16) まず太祖達の子孫である

イスラエル民

族。次に召し

出しによる教

会。一七) 十も

七と同様、多

数を意味する

概数。ローマ

皇帝たちをさ

しているので

あろう。

18) 偽キリスト

ふ
跡み蹠り、己に時と法とを変更する力ありと思わん、彼等は一時と數

時と半時との¹⁹⁾過ぎ去るまで彼の手に付されしままなるべし。然る

後、彼の権が剥奪せられ、彼が蹂躪せられ、終まで亡ぼさるるために、

審判開かれん。また國と権と天が下なる國の勢力とは、至高者の聖

者等の民に与えられん。その御国は恒久の國なり。王等みな彼に事え、

服い奉るべし。此にて言²⁰⁾終れり。我ダニエル大いに思ひ煩い、わ

が面色さえ變りけるが、その言をわが心に留め置けり。

第八章

ダニエルの見たる牡羊と牡山羊との幻象

一 バルタツサル王統治の三年に、一の幻象我に現れたり。我ダニエル
前に見しものの後に、わが幻象に見入りしは、我がエラム州なるス
サリの城に居りし時なりき。その幻象の中にて、我は自己がウライの
門の上に在るを見たり。さて我目をあげて見しに、看よ、高き角あ

19) 一般の解釈によれば「三年半」。

他の説ではこの数を、天主に定められたある期間を示すとする。——20) 問われた天使（一六節）の与えた説明。

第八章 リウライ河のほとりにあり、ペルシャ王の冬の居城がそこにあつた。

る牡羊おひこじ一頭水とうみずの前に²⁾立てり、その一つは他のより高くして、なお伸びつつありき。その後、^四われみ我見しに、この牡羊おひつじその角もて、西にしの方、北きたの方、南みなみの方を

突きけるが、すべての獸之に抵ることを得ず、またその手より救わることを得ざりしかば、彼意のままに振舞いて、強大になれり。^五われみ我見蕩とれ居りしに、

視よ、一頭の牡山羊おやぎ全地の面を過ぎて西より來りしが、地には触れざりき。この牡山羊おやぎはその眼の間に著いぢるしき角つのを具えたり。^六われ是は前に我が門の前に立てるを見たるかの角ある牡羊の許まで來るや、勢烈いきおいはげしくそれに馳せ向かい、

^七おひつじ牡羊おひつじの傍に近づくと共に猛り狂いて之にかかり、牡羊おひつじを擊うちてその二本の角ほんを碎きしが、牡羊之に敵すること能わざりしかば、そを地に倒たおして蹂ふみつけしかど、誰もその手より牡羊おひつじを救い得る者あらざりき。^八われかくて牡山羊おやぎは甚だ強大になりしが、その成長するに及びて、大なる角折れ、その下より四本の角生え出でて、天の四方に向かえり。然るにその角の一つより、また一本の小さき角出つのいで來り、南みなみに向かい東ひがしに向かい城しろに向かいて大きくなり、天の城に達とど。

2) ヘブ
本「河」
レオ語

くまで強大になりて、その城と星との幾つかを落し、之を蹂み躡れり。³⁾

二 二またそは城の君⁴⁾を凌ぐまで高ぶり、之より日々の牲⁵⁾を取り、なおその聖所の在る処を毀てり。三彼に日々の牲を荒らす力の与えられしは、罪の為なり。真理地に墮ちて、彼事をなさんに成らざるからん。三茲に我聖者等の一人の語るを聞けり。即ちその一人の聖者、誰に語り居りしかば我之を知らざれど、他の一人に云いやすく、日々の牲と、荒廃を齎したる罪とに關る幻象の続かんこと、及び聖所と城との蹂躡られてあらんことは、そも何時までぞや、と。一四その者彼に云いけるは、夕を送り朝を迎えて、一千三百日を経るまでなり。然る後聖所は潔めらるべし、と。一五我ダニエルがこの幻象を見て、その意味を曉らんと努め居りし時のことなりき、視よ、わが眼前に人の貌の如きもの立てり。一六しかして我聞きしに、ウライ河の中程より⁶⁾人の声して呼ばわり云いけるは、ガブリエルよ、この者に幻象を曉らしめよ、と。一七彼乃ち來りてわが立てる処に立ちしが、その来りし時我慄きつつ平伏しけ

³⁾聖人達を象徴する星。彼らを迫害することを意味する。

4)天主。5)天主の命じ給うた聖殿における毎日の犠牲のもの。

6)ウライ河の両岸の間のあたりから

るに、彼我に云いけるは、曉れ、人の子よ、それ、この幻象は終

一八 の時⁽⁷⁾に成就せらるべし。一八かく彼の我に語りし時、我地に平伏

一九 し居りしが、彼我に触れて我を立ちあがらせ、一九我に云いけらく、

我呪咀の終に起るべき事を汝に示さん、そはその期⁽⁸⁾には終末あ

ればなり。二〇汝が見たるかの角ある牡羊は、メデア人とペルシャ

人との王なり。二一またかの牡山羊はギリシヤ人の王にして、そ

人の眼の間にありし大いなる角は、是、その第一の王なり。二二然

るにその折れし時四本の角生え出で之に代りたれば、その国民の

中より四人の王⁽¹¹⁾起らん、されど己が力によりてにはあらず。

二三彼等の治世の後、不義の弥増さん時、厚顔にして奸智に長けた

る一人の王起らん。三四その権勢は強くなるべし、されど己が力に

よりてにはあらず。彼は人の信ずること能わざる程に一切を荒ら

し、幸運に乗じて事をなし、力ある者⁽¹²⁾と聖者等の民とを滅ぼし

(7)天主が定め給うた、ユデア民族とその祭祀との終る時。(8)迫害。

(9)二つの角とは、最初のペルシャ王キルスの

時に、互に混ざるに至つたメデアとペルシャ両王朝をさす。(10)この国の創建者にして最初の王となつたアレクサンデル大王。(11)アレクサンデル大王の死後將軍たちがその領土を分割してそれぞれシリア、エジプト、トラキア、マケドニアの王になつた。(12)王たち。

二五

て、¹³⁾ 二五 その 志^{ここるきし} を遂げん。奸計^{かんけい} その 手^て によりて 成就^{じょうじゅ} し、
その 心傲り^{ここるおご}、 彼^{かれ} すべての 物^{もの} の 豊^{ゆた} かなるに 多くの 人^{ひと} を 殺^{ころ} し、
なお 君^{きみ} の 君^{きみ} たる 者^{もの} に 立ち 逆らわん、 されど 人手^{ひとで} によらずし
て 滅ぼさるべし。¹⁴⁾

二六 三六 今 云^{いまい} いたる 夕^{ゆう} と 朝^{あさ} との 幻象^{まぼろし} は 真実^{まこと} な

り。されば 汝^{なんじ} この 幻象^{まぼろし} を 封じ置け、¹⁵⁾ そは 多くの 日^ひ の 後成^{まつよう}
就^{じゅ} すべければなり、と。それより 我^{われ} ダニエル 弱りて 数日^{すうじつ}
の 間^{あいだ} 病みけるが¹⁶⁾ 起^おき出^いずるや 王^{おう} の 用事^{ようじ} を なせり。されど
この 幻象^{まぼろし} には 我^{われおどろ} 驚けり、しかして 之^{これ} を 解釈^{ときあか} し 得る 者^{もの} は 一^{ひとり}
だに あらざりき。

第九章

七十週の予言

二二

一メデア人の裔アッスエルスの子ダリウス¹⁾ が、カルデア
人の國を治めたる第一年、即ちその治世の元年に、我ダ

第九章 1) 即ちキヤクサレスを
父とするアスチャゲス。本五・

13) ユデア教を迫害したアンチオコ四世。—喀前一・五二以下。

14) 喀後九・七。喀前六・八。

15) これを書きとめておいて、予言者として証明せよ。—16) 天主

の選民の上にかくも大なる禍が來り（二四節）、聖殿が破壊され聖なる祭祀が中止される（一節）だろうという予言が、ダニエルに数日間病むほどのひどいショックを与えたのである。

ニエル、主の御言が預言者イエレミアに下りて、イエルサレムの荒廃は七十年

三一と
その註

にて終るべしと告げたる、その年の数を、書によりて曉れり。²⁾ 三我乃ちわが天

参照。

主なる主にわが面を向け、断食をなし、亞麻布を纏い、灰を破りて、祈り且願

2)耶二

わんとせり。³⁾ 四即ち我わが天主なる主に祈り、告白して云えらく、大にして畏

五・一

るべき主なる天主、汝を愛し汝の御誠命を守る者に對して契約を保ち御憐憫を

二。二

垂れ給う者よ、我汝に願い奉る。⁴⁾ 五我等は罪を犯し、不義を行い、不敬なる所

九・一

為をなして汝に背き、汝の御誠命と御定めとを離れたり。⁵⁾ 六我等はまた、汝の

○参照

御名によりて我等の王等、我等の君等、我等の父祖、及び全國民に語りし汝の

三)尼九

下僕なる預言者等の言に従わざりき。⁷⁾ 主よ、正義は汝に歸すと雖も、赤面は

一。以

我等に帰す、そは今日ユダの人々、イエルサレムの住民、すべてのイスラエル

下。

の、近きにある者も、遠きにある者も、不義によりて汝に罪を犯したる故に汝の

四)尼一

逐いやり給いし諸の国において、赤面し居るが如し。⁸⁾ 主よ、赤面は罪犯した

五)巴一

る我等と、我等の君等と、我等の父祖とに帰す。⁹⁾ されど主我等の天主よ、汝

一。七。

一〇
の御許には憐憫と赦免とあり、そは我等汝に背きたればなり。一〇即ち我等は主我等の天主が、その下僕なる預言者等によりて我等の為に定め給える律法のままに歩むべしとの御声に従わざりき、ニイスラエルは舉りて汝の律法を破り、離れ去りて汝の御声を聽かざりき。是において、天主の下僕モイゼの書に録されたる呪咀と憎惡とは、⁽⁶⁾ 我等の上にかかり、そは我等主に對して罪を犯したればなり。二〇かくて主は、我等と我等を裁きし我等の君等とに向かいて、イエルサレムに行わたる事の如く、天が下に未だ曾てあらざりしほどの大なる禍を、我等に下さんと曰いし御言を成就し給えり。二〇この災禍はすべて、モイゼの律法に録されたる如く、我等の上に下りたれど、主我等の天主よ、我等は己が不義を離れ、汝の真理を考えんとて、汝の御面に願うことをせざりき。

一四主はこの悪におん目を留め、我等の上に禍を下し給えり。主我等の天主はそのなし給えるすべての御業に正しく在す。そは我等その御声に聽従わざりしが故なり。一五されば今、主我等の天主よ、汝力ある御手もて御民をエジプトの

八・一
五以下
利二六
以下。
•一四
申二
八
八・一
五以下
利二六
以下。

地より導き出し、今日の如く御名を成し給える者よ、我等は罪を犯し、不義を行ひて、¹⁾一六主よ、汝のすべての正義に背けり。願わくは、御忿怒と御憤激とを汝の都イエルサレムと、汝の聖なる山とより取り去り給え。蓋し我等の罪と我等の父祖の不義との故に、イエルサレムと汝の御民とは、我等の周囲にあるすべての人の笑いぐさとなれるなり。⁸⁾ 一七されば今、我等の天主よ、汝の下僕の願いと祈りとを聞き、御自身の為に、荒れ果てたる汝の聖所に御面を示し給え。一八わが天主よ、御耳を傾けて聞き、御眼を開きて我等の荒廃の状と、汝の御名を冠して呼ばれたる都とを照覽し給え、それ、我等の汝の御面前に祈願を陳べ奉るは、我等の義しきを持みてにあらず、ただ汝の御憐憫の豊かなるを持みてなり。一九主よ、聞き容れ給え、主よ、御心を和げ給え、御耳に留めて、行い給え。わが天主よ、御自身の為に猶予し給うなれ。そは汝の御名、汝の都ど汝の民とに冠して称えられたればなり。二〇我なおかく云いて祈り、わが罪とわが民イスラエルの罪とを告白し、わが天主の聖なる山の為、わが天主の御眼前

7) 巴二
出一四
二二。
一五
一六
8) 哀二
参考。

二
三
三
三
四
三
二
二五

にありてわが願いを陳べ、^{いの}なお祈りて語い居りし時、
視よ、はじめに我が幻象の中に見たる⁹⁾かの人ガブリエ
ル、夕の犠祭の頃、速かに飛び來りて我に触れ、¹⁰⁾我に
教え、我に語りて云いけるは、ダニエルよ、我が今出で
来れるは、汝に教えて曉らしめんが為なり。¹¹⁾汝が祈祷
を始めし時、御言既に出でしかば、我之を汝に示さんと
て來れり、そは汝御意に適える人¹⁰⁾なればなり。されば
汝この御言に注意して、幻象を曉れ。¹²⁾曲事廢められ、
罪止められ、不義絶やされ、恒久の正義斎らされ、幻象
と預言と成就せられ、聖の聖なる者¹¹⁾注油せらるるまで
汝の民と汝の聖なる都とに對して、七十週¹²⁾定められた
り。¹³⁾されば汝、知り、且意に留めよ、イエルサレム
を建て直すべしとの言出でてより、君たる受膏者の起る

⁹⁾本八・一六以下参照。¹⁰⁾主が愛情を注ぎ給う者。本一〇・一一参照。¹¹⁾注油せらるべき聖の聖なる者がだれであるか（メシア）は、多くのメシアに関する予言では、多くのメシアに関する予言では、ユデア人たちにはよく知られている。——¹²⁾民一四・三四及び結四・六にあるように、「一日は一年に当たる」。故にこの七十週すなむち四百九十日は四百九十年を意味する。¹³⁾タルガタ原語 abbreviates sunt の第一義は「縮められたり」。第二義は「定められたり」。即ち宇宙のために定められた期間が七十週だけ縮められた。これはヘブレオ語本の「切り離されたり」の意に適う。なお本節の「まで」は「ために」と訳す人もある。

まで、七週と六十二週とあらん、その街
衢と石垣とは、窮迫の時に建て直さるべ
し。三六その六十二週の後にキリスト殺さ
れん、¹⁴⁾ 彼を否まん民は彼のものにあら
ざるべし。或る民、来るべき一人の將に
率られて、都と聖所とを毀たん、その終
は荒地となり、戦争終りて後定められた
る荒廢あるべし。¹⁵⁾ ニセ彼一週の間に多く
の者と堅く契約を結ばん、しかしてその
週の半に犠牲と供物と廃せられ、¹⁶⁾ 聖殿
には憎むべき荒廢あらん、¹⁷⁾ この荒廢は
最極まで終まで続くべし。

¹⁴⁾ アルタクセルクセス一世がエスドラスをパレスチナに派遣した時（喇七・一二一一六）から年の七十週を起算すれば、七、六十二、及び一の和、即ち四百九十年目は、キリスト紀元の三十年近く、即ちキリストが公生活に入られた時に当たる。最初の七週は約五十年かかった都の建設をさす。—¹⁵⁾ メシアを殺した罪の罰として、イエルサレム市と聖殿は破壊されるだろう。これに將軍チトの率いるローマ軍によつて、西紀七〇年に実現した。—ヘブレオ語本では「大水」。即ちイエルサレムの荒廢が洪水の喩で示されている。—¹⁶⁾ 年の最後の週の間に、メシアが十字架上に御血を流す犠牲によつて、ユデアの犠祭を廃し給うだろう。—¹⁷⁾ マテオ二四・一五にあるイエズスの御言葉参照。

第十章

末の日頃に関する啓視

一　ペルシャ人の王キルスの第三年に、¹⁾ 又の名をバルタッサルという
ダニエルに、一つの事示されたるが、その事は眞実にして大なる力あり。
彼の事を曉りぬ、實に幻象には曉る力を要するなり。²⁾ その時
我ダニエル、三週の間哭けり。³⁾ 我その三週の果つるまでは、旨きパンを食せず、肉と葡萄酒とを口にせず、またわが身に膏(あぶら)をも塗らざり
き。⁴⁾ 四さて第一月の二十四日に、我チグリスという大なる河の畔にあり、⁵⁾
五目をあげて見しに、視よ、亞麻布を纏える²⁾一人の人あり、そ
の腰には純金の帶を締めたり。⁶⁾ 其の体は貴橄欖石の如く、その面は
電光を見るが如く、その眼は燃ゆる炬火の如く、その腕及びそれより
下、足に至るまでは、輝く青銅を見るが如く、その語る声は、群衆の
声の如し。この幻象を見しは、我ダニエル唯一人なりき。我と共に

第十章 1) キルス
がバビロニアを治めた第一年に、流寓のユデア人達は帰国を許されたが
ダニエルはキルスに止められて、帰国しないユデア人たちのために尽くさなければならなかつたので、一しょに帰らなかつた司祭のように。

居りし人々は之を見ざりしかど、甚だしき恐怖に襲われて、逃げ隠れたり。八かくて我ただ一人残りて、この大なる幻象を見しが、身

内の力残りなく去り、わが顔色変り、我絶え入らんばかりにて、力少しもあらざりき。³⁾ 我その語る声を聞きしが、聞きし時我は平伏

してわが顔を地につけ居たるに、一〇視よ、一つの手我に触れて、我を起こし、わが膝とわが手の末とを突かせたり。二二しかして彼我に

云いけるは、御意に適える人⁴⁾ ダニエルよ、我が汝に語る言を曉れ。いざ身を起こして立て。そは、我今汝の許に遣されたればなり、と。

彼がこの言を我に云いし時、我は顛えながら立ちあがれり。二三彼また我に云いけるは、恐るるなけれ、ダニエルよ。そは汝が暁らんと心がけ、汝の天主の御眼前にて身を苦しめたる最初の日より、汝の言は聽き容れられたればなり。我はすなわち汝の言によりて来れり。二三されど⁵⁾ ペルシャ人の國の君⁶⁾ 二十一日の間⁷⁾ 我を妨げ居りしに、

3) 本八・一七。
4) 本九・二三参照。

5) もつと早く打ち明けなかつた理由。

6) 守護の天使。

7) 即ちダニエルが祈りと断食とを続けた

間。¹⁸⁾ この争いはユデア人の囚れが終ることについて。ペルシャの守護の天使は、天主の民の帰国によつてその国の靈的利息が害されるのを防ごうとした。

視よ、頭立てる君^{きみ}の一人なるミカエル、我^{われ}を助けに來りしかば、我^{われ}そ
 こに留^{とど}まりて、ペルシヤ人の王^{おう}の傍^{そば}に居^いたり。¹⁰⁾ 一四さて我^{われ}が來^{きた}れるは、末^{まえ}
 の日頃^{ひごろ}に及びて汝^{なんじ}の民^{たみ}に起^おこるべき事をば、汝^{なんじ}に教^{おし}えん為^{ため}なり。そはその
 日頃^{ひごろ}に關^{かん}する幻象^{まぼうし}なり、と。一五彼^{かれ}がかくの如^{こと}き言^{ことば}を我^{われ}に語^{かた}れる間^{あいだ}、我^{われ}が
 顔^{かほ}を地^ちに伏^ふせて黙^{もだ}し居^おりしに、一六視^みよ、人の子^こに似^にたる者^{もの}わが唇^{くちびる}に触れし
 かば、我口^{われぐち}を開^{ひら}きて、わが前に立^たてる者^{もの}に語^{かた}りて云^いけらく、わが主^{しゆ}よ、
 汝^{なんじ}を見るや、わが筋々弛^{ふしぶしゆる}みて、わが身^みの力残^{ちからぬ}りなく去れり。¹¹⁾ 一七わが主^{しゆ}の
 下僕^{しもべ}、いかでわが主^{しゆ}と語^{かた}ることを得^えんや。蓋^そは、わが身^みに力少^{ちからず}しもなく、
 その上^{うえ}わが氣息^{いき}さえ止^とまりたればなり、と。一八是^{こゝ}において人の如^{ごと}くに見ゆ
 る者^{もの}、再び我^{われ}に触れ、我^{われ}に力をつけて、一九云^いいけるは、懼^{おぞ}るるなけれ、御^み
 意^{こころ}に適^{かな}える人^{ひと}よ、安^{やす}かれ、氣^きを励^{はげ}まし、心強^{こころつよ}かれ、と。彼^{かれ}のかく云^いいたる
 に、我^{われ}力を得て云^いけるは、語^{たま}り給^{たま}え、わが主^{しゆ}よ、實^げに汝^{なんじ}は我^{われ}に力をつけ
 給^{たま}えり、と。二〇彼^{かれ}乃ち云^いけるは、我が汝^{なんじ}の許^{もと}に來^{きた}れるは何^{なん}の為^{ため}なるか、

聖⁹⁾ミカエル
 はユデア民族¹⁰⁾の守護者であるので、関心¹¹⁾をもつていた
 エル人によくしてもらうため、ペルシヤ王のそばに留まつていた。

11) 賽六・七。

汝之を知るや。今我ペルシャ人の君と戰わん為に¹²⁾帰り行
かんとす。我の出で去るや、ギリシャ人の君來り現れた
り。¹³⁾ニされど我は眞実の書に示されたる事を汝に告げ
ん。凡て是等の事において、我を助くる者は、汝等の君な
るミカエルのほかにあらず。¹⁴⁾

二

アレクサンデル、アンチオコ・エピファネスなどに関する予言。

第十章

一我りはメデア人ダリウスの元年より、彼を励まし彼に力を添えん為に、その後立となれり。ニ我今汝に眞実を示さん。視よ、ペルシャになお三人の王起たん、されど第四の者はすべての者に優りて夥しき富を積み、その富によりて強大となるや、万人に檄してギリシャの国^{くに}を攻むべし。²⁾三然るにまた一人、強き王³⁾出で、大なる權力もて治め、

第十一章 1)十章で語つている天使¹⁾キルスの後ペルシャの王位についたのは、カンビセス、プセウドスメルデス、ダリウス一世、及びクセルクセスであつた。最後に挙げた王は大軍をひきいてギリシャへ出征した。

3)アレクサンデル大王。

12)ユデア人のために尽す。

13)天使はこれによつて、ペルシヤの次にギリシャの代になつても、天主の御民のために力を尽すと約束する。—14)本章一三節とその註九参照。

三

二

四

九 八

七

六 五

意にまかせて事をなさん。^四さりながらその勢盛なるに及びて、彼の国は破れ、天の四方に分るべし、但しそは彼の後裔に帰せず、また彼が治むるに揮いし権力の如くにもあらず。かく彼の國は支離滅裂になりて、是等の者に非ずして他の人々に帰すべし。⁴⁾五 南の王⁵⁾は力を得ん、されどその諸侯の一人⁶⁾彼を凌ぐ力を得、権勢もて治めん、その権勢は蓋し大なるべし。⁶⁾六年経て後彼等同盟せん、南の王の娘友誼を結ばんとて北の王の許に来らん、されどその腕の力を守り得ず、またその後胤は立たじ。かくてこの女は、之を導き、少時之が力となりたる若人等と共に、付ざるべし。⁷⁾せ然れどもこの女の根より生じたる芽は成立たん、彼は軍勢を率いて來り、北の王の州に入りて、彼等を虐げ、服わしむべし。八その上彼は彼等の神々、彫像、及び金銀の貴き器具をエジプトに分捕り行かん、彼かく北の王に對して勝利を得べし。⁸⁾九 南

⁴⁾アレクサンデルの国はその將軍たちに分割されて四王国となつた
⁵⁾エジプトのピトレメオ・ラギ。—⁶⁾セレウクス・ニカトル。⁷⁾ピトレメオ二世。フイラデルフオはシリアの王アンチオコ二世に強いて、その妻ラオデケを追い払わせ、ピトレメオの娘ベレニケを娶らせた。しかしふトレメオの死後、ラオデケは前の夫アンチオコを毒殺させ、ベレニケをその子と共に殺させた。

一〇

の王その国に攻め入らん、されど己が國に帰るべし。一〇その⁸⁾子等また怒りて多くの軍勢を集め、大河の溢るる如く押し寄せ來り、再び來りて憤激に駆られ、彼の⁹⁾軍勢と戰を交えん。ニ南の王乃ち怒りて出で來り、北の王と戰わんとして夥しき軍勢を用意せん、大軍はその手に付さるべし。一三彼多くを捕虜として

北の王の。
9) 南の王。

心高ぶり、幾万人を殲さん、されど勝利を得ざるべし。一三即ち北の王退きて、

10) 賽一九・一六。

前よりも遙かに大なる軍勢を募り、時を経、年を経ば、大軍を率い、夥しき軍用品を準備して押し寄せ來らん。一四その頃また多くの者南の王を敵として起ち、

11) パレ
スチナ

なお汝の民の裏切者の子等も思あがりて幻象を成就せしめ、かくて彼等仆るに至るべし。一五時に北の王攻め來り、塹を築きて要害堅固の邑々を取らん、

南の腕はこれに得堪えじ、その選りぬきの者起ちて禦がんとするも、その力あらざるべし。一六來りて彼を攻むる者、意のままに事をなさん、誰もその矢面に立つことを得る者あらじ。彼は光榮ある地¹¹⁾に入らん、そは彼の手によりて滅ぼさるべし。一七彼來りてその全國を取らんことを志し、之と公平なる協約を結

一七

一六

一五

一四

一三

一二

び、その國を滅ぼさん為に、¹²⁾婦人の娘を之に与えん、されどこの娘はその役に立たずして、彼の為を図らざるべし。¹³⁾彼また島々に目を付けて、數多之を取らん、彼なお侯を辱しめて之を廢せん、されどその恥辱は己が身に帰り来るべし。¹⁴⁾彼己が國の統治に意を向けん、されど躊躇倒れて在らずなるべし。¹⁵⁾茲にいと陋劣しくして王の位に応わざる者彼に代りて起たん、されど襲撃にもよらず戦争にもよらずして、日ならず滅び去るべし。¹⁶⁾ニ次にまた蔑しむべき者彼に代りて起たん、これは王としての尊敬を獻げらるることあらじ、されど彼ひそかに來り、欺きて國を獲べし。三その向かう所、戰う者の腕も拌かれて折れん、剩え契約の君¹⁷⁾もまた然せらるべし。三彼友好を結びて後も

¹²⁾アンチオコは一女をブトレメオ五世にめあわすことによつて、エジプト金土を手に入れようとした。

¹³⁾アンチオコが地中海の島々と沿岸の国々との一部を征服してから、ローマ人は彼に戦を宣した。ローマの執政官ルチウス・スキピオはマグネシアでかれを討ち取つた（西紀前一九〇年）。¹⁴⁾彼はエリマイス州にあるベルの神殿から物を掠めようとして人民に殺された。¹⁵⁾セレウクス四世は毒で死んだ。¹⁶⁾アンチオコ四世エピファネス。¹⁷⁾「契約の君」とはアンチオコに殺された大司祭オニア三世であろう。

之に欺瞞を行ひ、上り来るや、少數の民もて勝利を得ん。三四彼即ち、富みて豊かなる諸邑に入り、その父も、その父の父も曾てなざざりし事をなし、その奪いたる物、掠めたる物、及び財宝を散らし、謀計をめぐらして要害を攻め、時至るまでかくなすべし。三五彼その力と勇氣とを揮いて、大軍を率い南の王に向かわん、南の王また奮い起ちて、多くの甚だ強き援兵を率い戦鬪に赴くべし、されど彼等は敵することを得じ、そは謀計をめぐらしてこれを陥るべければなり。三六かくて彼と共に糧を食する者彼を滅ぼすに至らん、その軍は潰え、多くの者殺され仆るべし。¹⁸⁾三七この二人の王の意は危害を加えんとするにあり、食卓を共にして虚言を語らん、されどその効なかるべし、是終末は他の時まで延べられたればなり。三八彼は夥しき財宝を携えて己が國に帰らん、心に聖なる契約を敵視して事をなし、かくて己が國に帰らん。三九然れども定めの時至らば、彼南に引き返し来らん、但しこの度は先の如くにはあらざるべし。三〇即ち橈船に乗れるローマ人來りて彼を攻めん、彼は敗れて帰り、聖なる契約に對して憤

18) プト
レメオ
六世は己が部下の裏切りによつて下エジプトでアンチオコ四世に敗れた。

三一 りを漏らし、聖所の契約を棄てたる者に目を付けて企む所あるべし。三一彼より
 腕¹⁹⁾出で来りて、城の聖所を流し、日々の犠牲を廃せしめ、荒れたる所に憎む
 べきもの²⁰⁾を立てん。三一契約を破る不敬なる者は欺き佯ることあらん、されど
 己が天主を知る民はそを守りて事をなすべし。三一民の間の学識ある人々は、多
 くの者に教を垂れん、然れども彼等は少時の間、剣に刺され、火焔に焼かれ、
 捕虜にせられ、掠奪に逢いなどして倒ることあるべし。三四その倒れたらん時、
 彼等いざさか援助を得て救われん、なお多くの者偽りて彼等の方に加わるべし。
 三五学識ある人々の中にも倒るる者あらん、是、予定の時まで、彼等が試みられ、
 選り抜かれ、潔められん為にして、なお他の時あるべければなり。三六かの王は
 己が思いのままに事をなし、思いあがりてあらゆる神に尊大なる態度を取り、
 神々の神に対してさえ大なる事を言い、忿怒の満つるまでは榮ゆべし、實に定
 められたる事は行わるるなり。²¹⁾ 三七彼はその父祖の天主を重んぜず、女の快樂
 に耽り、何の神をも顧みざらん、そは彼一切に對して起ち逆らえばなり。三八但

¹⁹⁾彼に
味方す
る者。

20)偶像
21)アン
チオコ
・エビ

ファネ
ス治下
の迫害
の予言
本八・
九以下
参照。

し彼はその代りに、マオジム²²⁾を神^{カミ}と祀り、己^{おの}が父祖^{ふそ}の知らざりし神^{カミ}を、
金銀宝石^{きんぎんぼうせき}その他^たの貴き物^{とうともの}もて崇めん。^{三九}彼^{かれ}は己^{おの}が知りたる異國^{ことくに}の神^{カミ}を用い
てマオジムを固^{かた}うせんとし、その榮^{さかへ}を大^{おお}いに揚げ、彼等^{かれら}²³⁾には、多くの權^{けん}
力を授け、また無償^{ただ}にて土地^{とち}を分^わかち与^{あた}うべし。^{四〇}さて定められたる時^{とき}至^{いた}
らば、南の王^{おう}彼^{かれ}と戰わん、北の王^{おう}は戰車^{せんしゃ}と騎兵^{きへい}と大船隊^{おおふなたい}とを率^{ひき}いて、疾風^{はやて}
の如く來りて之^{これ}を襲い、國々^{こくこく}に攻め入り、之^{これ}を蹂躪^{あみにじ}りて通り過ぐべし。^{四一}
彼^{かれ}なお榮^{さかへ}ある地^ち²⁴⁾に入り行かん、倒^{たお}るるは²⁵⁾多かるべし。その手^てを免^{まぬか}る
べきは、エドム、モアブ、及びアンモンの子等^{こら}の重立てる者^{もの}、ただ是の
み。^{四二}彼^{かれ}國々^{くにぐに}にその手^てを伸べん、エジプトの地^ちも免^{まぬか}るを得^えじ。^{四三}かくて
彼^{かれ}エジプトの金銀^{きんぎん}の宝庫^{たからぐら}及びあらゆる財寶^{おの}を己^{おの}が有^{ある}となさん、リビアとエ
チオピアともまた、その通り過ぐる所^{ところ}となるべし。^{四四}東^{ひがし}と北^{きた}とよりの風聞^{うわざ}
彼^{かれ}を愕^{おどろ}かさん、彼^{かれ}すなわち多くの人^{ひと}を滅ぼし絶やさんと大軍^{たいぐん}を率^{ひき}いて寄せ
来るべし。^{四五}彼^{かれ}海^{うみ}の間^{あいだ}²⁶⁾において榮^{さかへ}ある聖山^{せいざん}の上^{うえ}に、その幕屋^{まくや}その宮殿^{きゆうでん}を

22) このマオジムの神とは、ローマのジュピターであるらしい。王はそのために神殿を建て、高価な奉納物をローマに送つた。²³⁾マオジムに帰依せらる人々。

24) 一六節に同じ。²⁵⁾倒^{たお}る國^{くに}。²⁶⁾死^死の間^{あいだ}。

海と地中海と

設けん、されど彼やがて終に至るべく、しかも之を助くる者一人だにあらじ。⁽²⁷⁾

第十二章

世の終末の事に関する予言一結び

二
 一その時^り汝^{なんじ}の民^{たみ}の子等^{こら}に味方^{みかた}する²⁾偉大^{いたい}なる君^{きみ}ミカエル
 起^たちあがらん、國々^{くにぐに}の民^{たみ}ありてよりこの方^{かた}、その時に至^{いた}る
 まで、³⁾未^{いま}だ曾^{かつ}てあらざりしほどの時^{とき}来るべし。その時汝^{なま}
 の民^{たみ}にして書^{ふみ}に録^{かきしる}されたるを見出^{みだ}されたらん者は、何れも
 皆救^{みなす}われん。また地の塵^ぢの中に眠^{ねむ}る者のうち、多くは目^{おお}
 を覚^さまし、その或^{ある}者は永遠^{えいえん}の生命^{せいめい}に至^{いた}り、或^{ある}者は恥辱^{ちじよ}
 を受^うけて、窮^{きわま}りなく之^みを見るべし。⁴⁾三知識深^{しきふか}き人々^{ひとびと}は蒼^{おお}
 穹^{さら}の輝^{かが}きの如^{ごと}くに輝^{かが}かん、多くの者^{もの}を教えて正義^{せいぎ}に導^{みちび}く人^{ひと}
 々^{ひと}は、世々^よ限りなく星^{ほし}の如^{こと}くなるべし。⁵⁾四然^{しか}れどもダニエ

(27)聖殿を瀆した彼はみじめな死にざまをした。

第十二章 ①本書第九章後半に長々と記されているアンチオコ・エピファネスの時代。②イスラエル守護の天使。本一〇・一三、二一参照。③次に天使は、一時の患難から万物の終りに話を移す。④世の終りにおける肉身のよみがえり。⑤マテオ二五・四六。⑥天主の知識を有し、その知識に従つて生活する人々。本一一・三三参照。

ルよ、汝定められたる時まで、この言を閉籠め、この書を封じおけ。多く
の人そを限なく調べて、知識を増すべし、と。五 この時我見しに、視よ、
他に一人の者あるが如く、一人は河の此方なる岸に、一人は河の彼方なる

7) 本七・二五
とその註参照
8) 黙一〇・五

他の岸に立てり。六 我かの亞麻布を着て河水の上に立てる人に云いけるは、
この不思議なる事は何時までにて終るべきか、と。七 我聞きしに、かの亞麻
布を纏いて河水の上に立てる人、その右手と左手とを挙げて天をさし、永
遠に活き給う者によりて誓えり、曰く、一時と數時と半時とを終るまで

9) その日その時を知り給う
はただ天主御父のみ。マテ
オ二四・三六

なり。しかして聖なる民の群の分散が終らん時、是等の事一切成就せらる
べし、と。八 我聞きしかど曉り得ざりき。我また云いけるは、わが主よ、
是等の事の後に、何事があるべき、と。九 彼云いけるは、往け、ダニエル、
それ、この言は定められたる時まで閉籠め且封じ置かるるなり。一〇 多く
の者選み別けられ、潔められ、火によりての如く鍊えられん。不敬なる者は
不敬に振舞うべし。凡て不敬なる者は曉らざらん、されど知識に富む

一〇 九 八

参照。

二
者^{もの}¹⁰⁾は曉^{さと}るべし。¹¹⁾二日^ひ々^びの犠牲^{いけにえ}の廢^{はい}せられ、荒^あれ
たる処^{ところ}に憎^{にく}むべきものの立てられん時^{とき}よりして、一千二百九十日¹²⁾あらん。¹²⁾忍^{しの}び待^まちて、一千三百三十五日¹³⁾に至^{いた}る者は至福^{さいわい}なるかな。一^三さて汝^{なんじ}は定められたる時^{とき}まで、進^{すす}み行^ゆけ。汝^{なんじ}は憩^{いこ}いて、¹³⁾日^ひの終^{おわり}に至^{いた}らば起^たちて汝^{なんじ}の分^{ぶん}に止^{とど}まるべし。¹⁴⁾

以上我等が読み来れるダニエルのことは、ヘブレオ語の原典にあり。以下この書の終に至るまでは、テオドシオン版より訳出したるものなり。

第十三章

スサンナの事件

一
茲^{ここ}にバビロンに住める一人の人^{ひと}あり、その名をヨアキムと云^いしが、^レその娶^{めと}妻^{つま}は、名^なをスサン

¹⁰⁾本章三節と同じ。——¹¹⁾善人と悪人と分離は、アンチオコの時代にも世の終りにも行われる。——¹²⁾ここではアンチオコの迫害についていう。即ち本八・一四の二千三百日は患難の全期間を示すのに、ここは最もひどい迫害をさす。それで次節に四十五日生きのびる者は幸いだとあるのである。——¹³⁾ダニエルはその時には生きていな^いだろう。——¹⁴⁾幸福な復活と永生とを暗示。

第十三章 ここに語られている話はダニエル若年の頃の出来事で、彼がナ

ナ²) と云い、ヘルシアの娘にして甚だ美しく、天主を畏る者なりき。三蓋
 はその両親、共に義人にして、己³が娘をモイゼの律法に遵い教え育てたれば
 なり。四またヨアキムは頗る裕福にして、その家の近くに果樹園を有ちける
 が、ユデア人等は彼の許に集い来れり、そは彼すべての人の中にて最も声望
 ありしが故なり。五さてその年民の中より一人の長老裁判者として立てられた
 るが、「それ、不義はバビロンより、民を導くと見えし裁判者なる長老等よ
 り出で来れり。」と主が曰えるは、即ち彼等のことなり。³⁾六この人々は屢々
 ヨアキムの家に来れり、また裁判を受くべき事ある者は、みな彼等の許に來
 れり。七正午に至りて人々立ち去るや、スサンナその夫の果樹園に入りて漫
 歩をなせり。八然るにかの長老等、その日毎入って漫步するを見、之を恋い
 慕いて情を燃やし、九己³が心を乱し、天を仰ぎ見ず、正しき審判を思ひ出さ
 ざらんとて、その目を背向けたり。一〇かく彼等は兩人とも、彼女を恋いて胸
 を痛め居りしかど、未だ互にその悩みを語り合いしことはなかりき。一一蓋は

プコドノ
 ソル王の
 もとで大
 なる勢力を
 得た後
 にあつた
 こと。時
 代順では
 第一章の
 次にあた
 る。

2)スサン
 ナとは
 「百合」
 の意。
 3)耶二三
 一四。

彼等彼女と同衾せんと欲する、己が恋情を互に打ち明くることを恥じたればなり。

三かくて彼等は彼女を見んと、日毎心を配りて窺い居りしが、その一人他の一人云いけるは、三いざ我等家に行かん、蓋し昼食の時なりと。彼等乃ち互に別れて出でたれど、

四また立ち戻りて、同一所にて落合うに及び、互にその故を聞いて、己が恋情を打ち明けたり。是において彼等共に謀りて、彼女ただ独りに逢うことを得べき時を定めぬ。

五さて彼等がかく都合よき日を窺い居りし間のことなりき、或る時スサンナ、昨日の如くまた一昨日の如く、少婢ただ二人を伴いて園に入り来り、水を浴びんと欲したり、そは暑かりしが故なり。一六折しも其処には誰も人在らざりき、在るはただ隠れて、彼女を見守れるかの二人の長老のみ。一七彼女乃ち少婢等に云いけるは、我に油と香料とを持ち来れ、また我が水を浴びることを得ん為に、果樹園の門を開ぢよかし、と。一八彼等は彼女の云い付けたる如くなして、果樹園の門を開し、彼女の命じたるものを取り来らんと、裏門より出で行きたり。彼等は内にかの長老等の隠れ居ることを知らざりしなり。

十九さて少婢等が出で行くや、二人の長老は起ちあがり、彼女の許に馳せ寄りて云いける

二〇 は、二〇視よ、果樹園の門は閉鎖されたり、誰も我等を見る者なし。我等は汝に恋い焦れ居るなり。されば我等の意に従いて、我等と同衾せよ。二二汝もし之を拒まば、我等証言をなして、一青年汝と共にあり、この故に汝少婢等を汝の許より出しやりしなり、と云わん、と。三三是においてスサンナ嘆息して云いけるは、我全く進退谷まれり、蓋は我この事をなすにおいては、死我に臨み、四なざるにおいては、我汝等の手を免れざるべければなり。三三寧ろ主の御眼前にて罪を犯すよりは、かかる事をなさずして、汝等の手に陥ること、わが為によけれ、と。五四かく云いてスサンナ、大声をあげて叫びけるが、長老等もまた彼女に对抗して叫び出でたり。五五しかしてその一人は、果樹園の門口に馳せ行きて、これを開けり。五六是において家の下僕等、果樹園における叫びを聞きつけ、何事の起これるかを見んものと、裏門より馳せ入りたり。二七されど長老等が語るに及びて、下僕等は大いに恥じ入り、そはスサンナに就きて、かかる事を云われし例未だ曾てあらざりければなり。そ

4) 私通は死刑に当たり（申）
 • 一〇参照。
 (利二〇)
 • 九にあ
 る貞潔な
 ヨゼフの
 同様な答
 を思い合
 せよ。

5) 創三九

6) 民五
7) 利二
四・一
四。

二八
二九
三〇
三一
三二
三四
三五
三六
三七
三八

の翌日のことなりき、二八人々彼女の夫ヨアキムの許に来れる時、かの二人の長老も、スサンナを陥れ、之を死刑に処せんとの惡しき企図を懐きて來り、二九人⁶⁾の前にて、ヘルキアの娘、ヨアキムの妻スサンナを召びにやれ、と云いければ、彼等直に人を遣せり。⁷⁾彼女乃ちその両親子女及び親戚一同と共に來りぬ。三一然るにスサンナは甚だ嬌やかにして眉目美しかりければ、三二かの惡しき者等、せめてはその美を心ゆくまで眺めんものと、命じてその面被を去らしめたり。⁶⁾（蓋は彼女面を包み居たればなり。）三三時にその一族、及び彼女を知れる者みな泣きたりき。三四さてかの二人の長老は人々の中に起ちあがり、その手を彼女の頭にかけしが、⁷⁾三五彼女は泣きながらも天を仰ぎ居たり、是、その心中に主を恃み居たればなり。三六長老等云いけるは、我等ただ一人にて果樹園の中を歩み居りしに、この女一人の少婢を伴いて入り來り、果樹園の門を閉鎖すや、少婢等を己が許より去らしめたり。三七忽ち其処に隠れ居たる一人の若者その許に來りて、彼女と共に臥しぬ。三八折しも我等は果樹園の一隅に居りしが、この

不義を見るや彼等の許に馳せ行き、その共に交わり居るを見たり。三九その男

は我等よりも強かりしかば、我等之を捕うること能わざりき。彼は門を開きて逃げ去れり。四〇我等乃ちこの女を捕えて、かの若者の誰なるかを問い合わせて尋ね

しが、彼女は我等に告ぐることを拒みき。我等はこの事を保証する者なり、

と。四一群集は民の長老たり判事たる彼等を信じて、ついに彼女を死に定めたり。四二時にスサンナ大声をあげて呼わり云いけるは、永遠の天主よ、汝隠れ

たるを知しめし、一切をその成るに先立ちて知り給う者よ、四三彼等が我を陥れんと偽の証立てたることは、汝の知り給うところなり。視給え、我

はこの人々が悪意もて我を陥れんと虚構たる、かくの如き事は何一つなざざりしに、死するなり、と。四五主はその声を聴き給えり。四五即ち彼女が死刑の為引き行かるる時、^{四六} 主はダニエルと名稱る、まだ年ゆかぬ若者の聖なる靈を刺戟し給いければ、^{四七} 彼大声をあげ呼わりけるは、我はこの女の血につきて責なし、と。四七是において人々みな彼の方を振り向き、汝が云いたる

(8)ユデア人の習慣法によつて、投石の場所へゆく道を触れる者に「だれか受刑者の無罪を立証し得る者はないか」と、呼ばわらせた時。

四八 その言は何の謂ぞ、と云いしに、四八彼その只中に立ちて云いけるは、イスラエ

ルの子等よ、汝等は審理をも行わず事の真相をも知らずして、イスラエルの娘

を罪に定めたるほど、爾く愚なるか。四九立ち帰りて裁判に問え、彼等はこの

女を陥れんとして偽の証を立てたるなり、と。五〇是において人々急ぎ立ち帰

りしに、長老等の彼に云いけるは、汝我等の只中に坐し、我等の為に事を明ら

かにせよ、そは天主汝に老齡の長所を与えていたればなり、と。五一ダニエ

ル乃ち人々に云いけらく、かの一人を互に引き離し遠ざけよ、我彼等を審理べ

ん、と。五二かくて彼等互に引き分けらるるや、彼その一人を召び寄せて之に云

いけるは、惡事に日を送りて年老いたる者よ、さきに汝が犯したる罪、今ぞ汝

に報い来る。五三無辜者と義者とは、汝之を殺すべからず、と主の曰えるにも

拘らず、汝は不正なる裁判を行ひて、無辜者を虐げ、罪ある者を放免したり。

五四されば今、汝もし彼女を見たりとせば、何の樹の下にて彼等が語らい居るを

見しか、我に告げよ、と。彼は、乳香樹の下にて、と云えり。五五ダニエル云い

四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五四

四八 五〇 五一 五二 五三 五四 五四

(9)かの二人の謹謗者ではなく、会衆のなかの長老たちみな。

けるは、汝は正に己が首に係る虚言を吐きたり、蓋し視よ、天主の使者、その御旨を受けて、汝を両断すべし。¹⁰⁾と。五六次に之を去らしめたる後、命じて他の一人を来らしめ、之に云いけるは、カナアンの裔にしてユダの裔にあらざる者よ、汝は眉目美きに惑わされ、汝の心は恋情に乱れたり。^{五七}汝等イスラエルの娘等にかくなしけるに、彼等怖れて汝等と語らえり。されどユダのこの娘は、汝等の不義に与せざりき。^{五八}されば今、汝彼等が何の樹の下にて共に語らい居るを見かけしか、我に告げよ、と。然るに彼は、松の樹の下にて、と答えたり。¹¹⁾五九ダニエル之に云いけるは、汝は正しく己が首に係る虚言を吐きたり。實に主の使者、汝を両断し、汝を殺さんと、剣を構えて待てるぞ、と。^{六〇}是において会衆皆大声をあげて叫び、御自身を持む者を救い給う天主を頌めたたえけるが、^{六一}かの二人の長老に対しては、(ダニエル彼等が偽証したることを本人の口によりて證明したれば、)一齊に立ちかかり、彼等が惡意を抱きてその隣人になしたる如く、之になし、^{六二}以てモイ

10)ギリシヤ語本では、木の名 schinoと動詞 schizo。「まつ」につに割る」とをかけた洒落。

木の名 prinoをかけた洒落。

ゼの律法を履行せんとし、¹²⁾ついに彼等を殺せり。

かくてその日無辜血は救われたり。¹³⁾ヘルキアと

その妻とは、己が娘スサンナの為、その夫ヨアキ

ム及び親戚一同と共に、天主を讃美せり、そは彼

女に何の恥ずべきことも認められざりしが故な

り。¹⁴⁾六四またダニエルはその日より後、民の眼前

に偉大なる者となれり。¹⁵⁾やがてアスチアゲスは

その父祖の許に葬られ、ペルシャ人キルスその國

を継ぎたり。¹⁶⁾

六三

六四

六五

第十四章

ペルの話とベビロニア人の祀り居たる竜の話

一一

かくてダニエルは王の食卓に列なる者となり、¹⁷⁾そのすべての友に超えて敬われ居たり。然るに

第十四章 ①支配権がメデア人およびペルシャ人に移ることを予言していたダニ

12) 申一九・一九。13) 七十人訳の六三節以下は「されば正しき若者たちはヤコブの愛子なり。われらは健氣なる若者たちを子の如くに護らん。そはかかる若者たちは天主を畏るるによりて上智と聰明との靈、世々に至るまでかれらの裡に住むべければなり」。—14) ギリシャ語本では本節が次の話の冒頭になつてゐる。

三
バビロニア人には、名をベル²⁾という偶像ありて、之が為に日々佳き麦粉十二
升^季、羊四十頭³⁾及び葡萄酒六壺を費せり。三王もまた之を祀りて、日毎拝み
に行きけるが、ダニエルはその奉する天主を礼拝したれば、王彼に云いけるは、

何とて汝はベルを拝まざるか、と。四彼乃ち答えて之に云いけるは、そは、我れ
ひとの手に成れる偶像を拝まず、ただ天地を創造りすべての肉物を掌^{つかさど}る權能を

有し給う活ける天主のみを拝めばなり、と。五王また彼に云いけるは、ベルは

汝に、活ける神なりと見えざるか。汝見ずや、彼日毎に、いかばかり食い且飲む

かを、と。六ダニエル微笑みて云いけるは、王よ、歎^{あき}かれ給^{たま}うなかれ。是はこ

れ、内^{うち}は粘土、外^{そと}は青銅にして、何の時にも物を食いしことあらざるなり、と。

七是において王怒りてその司祭等を召し、之に云いけるは、汝等もし是等の消費

費^え物^{ぐら}を食う者の誰なるかを我に告げずば、死せざるべからず。八されど汝等も

シベルの是等を食うことを証示し得ば、ダニエル死すべし、そは彼ベルに対し

て冒流の言^{ほうりゆ}を吐^{ことば}きたればなり、と。時にダニエル、王に云いけるは、汝の御言

エルはキルスとも親しい間

つてい

た。

2)バビ

ロニア

國のお

もな神

々の一

つ。

3)七十

人訳は

「羊

四頭と

油」。

九　の如くなれかし、と。九因みにベルの司祭等は、その妻、幼兒、子女を除きて、七十人

一〇ありき。さて王ダニエルを伴いてベルの宮に行きたるに、一〇ベルの司祭等云いけるは、
視よ、我等外に出でん。されば王よ、汝食物を供え、葡萄酒を調合え、然る後戸を開鎖

二し、汝の指環もて之に封印し給え。一しかして汝明朝早く來り見給いて、もしすべて
の物ベルに食い尽され居らずば、我等死せん、されどもし然らば、我等を誣いて虚偽

三を云いたるダニエル死すべし、と。二彼等は事を見くびり居れり、そは供物卓の下に秘
密の入口を設け置きて、常にそこより入り、それらの物を食い居たればなり。三かくて

四彼等が出て行きし後のことなりき、王ベルの前に食物を供えたるに、ダニエルその僕等
に命じて灰を取り来らしめ、王の前に之をあまねく宮の中に撒けり。それより彼等出

五で戸を開鎖し、王の指環もて封印して立ち去りぬ。一四然るに司祭等はその毎になす如
く、夜の間に、己が妻子を伴いて入り行き、すべての物を食尽し飲尽せり。一五さて王は

六朝未明に起き出でけるが、ダニエルも彼と共に然せり。一六王、ダニエルよ、封印は無事

一七なりや、と云いしに、彼、王よ、無事なり、と答えたり。一七やがてその戸を開くや否や、

王供物卓の上を見て、声高く叫び云いけるは、ベルよ、汝は偉大なるかな、汝には何の欺瞞もなし、と。^{一八}されどダニエルは笑いながら王を引き留め、中に入らざらしめて、云いけらく、視給え、鋪石を。是等が何者の足跡なるかに注意し給え、と。^{一九}王云いけるは、我見るに、男、女、子供等の足跡なり、と。王乃ち怒りて、^{二〇}司祭等及びその妻子等を捕えしめたるに、彼等が入りて卓の上にある物を食う折に用いたる、秘密の戸口を彼に示せり。己が入りて王彼等を死刑に処し、ベルをダニエルのなすがままに任せければ、彼之をその宮と共に毀ちぬ。然るにその処にまた巨大なる竜ありて、^{二二}是において王彼等を死刑に処し、ベルをダニエルのなすがままに任せければ、彼之をその宮と共に毀ちぬ。然るにその処にまた巨大なる竜ありて、^{二三}是において王彼等を死刑に処し、ベルをダニエルのなすがままに任せければ、彼之をその宮と共に毀ちぬ。然るにその処にまた巨大なる竜ありて、^{二四}ダニエル云いけるは、我が主なるわが天主を礼拝するは、それが活ける天主にて在すに由るなり。されど是は活ける神にあらず。^{二五}さて王よ、汝我に許可を賜え、さらば我、剣や棍棒を用ひずして、この竜を殺さん、と。

(4)近東お
よびエジ
ptonには
蛇神崇拜
がひろま
つていた
ので、バ
ビロンに
生きた蛇
を神とし
て崇める
習慣があ
つたのも
肯かれる

二六

王乃ち、我汝に許可を与う、と云えり。是においてダニエル、瀝青と脂肪と毛髪とを取り、之を共に煮て団塊を造り、之を龍の口に入れしに、龍は張り裂けたり。ダニエル云えらく、視よ、汝等が祀り居りしものを、と。

二七

云いけるは、王はユデア人になりたり。彼ペルを毀ち、龍を殺し、司祭等を我等に付せ、然らずんば我等汝と汝の一家とを殺さん、と。是において王、彼等が激しく己に迫るを見て、詮方なきままにやむを得ず、ダニエルを彼等に付しければ、彼等之を獅子の穴に投げ入れたり。かく彼の其

二八

処に在ること六日なりき。⁵⁾ この穴には七頭の獅子居りて、人々之に日毎屍一個と羊二頭とを与え居りしが、その時には彼等にダニエルを啖わしめんとて、何をも与えざりしなり。然るにここに、ユデアにハバククとい

二九

いう預言者⁶⁾あり、粥を煮、パンを碎きて鉢に入れ、麦刈る人々の許に持

5) ダリウスの治世にも、ダニエルは一夜よもすがら獅子の穴に入れられたことがあつた。

6) 時代のへだたりから推せば、このハバクク予言者は旧約聖書中のハバクク書を書いたのと同一の人でないことがわかる

三三

ちゅかんとて、烟に赴きけるに、三主の天使ハバククに云いけるは、汝の持てるその食物をバビロンに携え行き、獅子の穴の中に居るダニエルに与えよ、と。

八結八

三四 ハバクク云いけるは、主よ、我はバビロンを見たることなく、またその穴を

も知らず、と。三五 是において主の天使彼の頭の頂を掴み、その頭髪を握りて

之を運び、一呼吸の間に之をバビロンなるその穴の上に却しぬ。① 三六 ハバクク

叫びて云いけるは、天主の下僕ダニエルよ、天主の汝に遣り給える食物を摂れ、
と。三七 ダニエル云いけるは、天主よ、汝我を憶い出で給えり、汝を愛する者を
見棄て給わざりき、と。三八 ダニエル乃ち起ちて食しけるが、主の天使はまた直

にハバククをその旧居りし廻に連れ戻せり。三九 かくて七日目に王ダニエルを悼
まんとて來り、穴に至りて中を覗きけるに、視よ、ダニエル獅子の只中に坐し
居たり。四〇 是において王声高く叫びて云いけるは、偉大なるかな、汝、ダニエ

ルの天主たる主よ、と。しかして彼を獅子の穴より引き出さしめ、四一代りに之
を亡き者にせんとしたる人々をその穴の中に投げ入れしめたるに、彼等は瞬く

四一

四〇

三九

三八

三七

三六

三五

三四

四二

間に彼の前にて食い尽されたり。^{四三}是において王は云えり、全世界に住める者皆ダニエルの天主を畏れ敬えよかし、そは彼こそ地上に徴と奇蹟とを行う救い主にして、^{四四}ダニエルを獅子の穴より救い給える者なればなり、と。

四四 キルスはまだダニエルの天主が唯一の神であることを認めてはいない。